



世田谷山観音寺・特攻観音堂



観音堂協の特攻絵画展示

第61回特攻平和観音年次法要



報 特 攻

平成24年11月

第93号

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-1-1靖国神社遊就館内・地階

電話 03 (5213) 4594 FAX 03 (5213) 4596

http://www.tokkotai.or.jp 振替口座 00140-6-59580

編集人 飯田正能 発行人 羽瀨徹也 印刷所 ヨシダ印刷株式会社

目次

Table listing contents including '第61回特攻平和観音年次法要', '特集 特攻インタビュー', '海軍航空特攻', '天皇、皇后両陛下と富岡八幡宮', '回天の追憶と祈り', '日本解放―田中内閣成立以降の', '中共の対日工作要領', '日本近現代史の真実', '松本から飛び立った特攻隊員達の遺墨展を参観して', '新刊図書紹介', '事務局からの報告等'.

日時 平成24年9月22日(土) 秋分の日 14時〜15時20分 場所 世田谷山観音寺・特攻観音堂 参列者 御遺族29名、御来賓・会員等

式次第 約190名、他に当日受付の一般参列者50数名、合計約280名

梵鐘点打 三回 司会 及川 昌彦 式衆入堂 世田谷山観音寺山主他 倉形 寛

国歌斉唱 トランペット 堀田 和夫 山主願文 特攻平和観音経 堀田 和夫

神 儀 駒繫神社宮司 澤田 浩治 世田谷山観音寺山主 太田 賢照

修祓の儀・降神の儀・献饌の儀 祝詞奏上・玉串奉奠・撤饌の儀 祭文奏上 公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長 杉山 蕃 代読・専務理事 衣笠 陽雄

挨拶 世田谷区長 保坂 展人 献 吟 一誠流 石橋 一歌

歌 世田谷コールエーデ合唱団 特攻慰霊顕彰会男性有志 龍笛 逢坂 龍信

指揮 大穂 孝子 指揮 堀田 和夫

「ふるさと」「加藤隼戦闘隊」 トランペット 堀田 和夫

「同期の桜」 全員斉唱「海ゆかば」 トランペット 堀田 和夫

献 吟 吟 石橋 一歌 八絃隊長 田中 秀志 昭和十九年十一月二十七日 レイテ湾で戦死 大丈夫は大いなる気宇とりもちて 大地歩みゆけ力の限り 菊水六号第7昭和隊 松吉 正資 昭和二十年五月十一日 沖縄周辺洋上で戦死 ゆく身には ひとしほしむるふるさとの 人のなさけのあたたかきかな

焼 香 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長代理

専務理事 衣笠 陽雄

御遺族各位

御来賓各位

会員・一般各位

式衆退堂

池前祭 山主 読経、神官 修祓・

祝詞奏上後、式衆退場

直 会 15時30分〜16時30分

第61回特攻平和観音年次法要

平成24年9月22日(土) 秋分の日、世田谷山観音寺・特攻観音堂において、第61回特攻平和観音年次法要(注1)が厳かに齋行された。秋分の日、即ち、春秋2回ある昼と夜の長さが等しい日の秋の日、つまり、太陽が北から南へ赤道を横切る日が9月23日から22日になるのは、116年振りとのことである。

今年は9月に入っても、例年になく猛暑日が続いたので、このままでは当日熱中症になる方が出るのではないかと心配されたが、さすがに暑さ寒さも彼岸までとか、この日は猛暑も一段落し、やや天候の不安定な曇り空ではあったが、無事齋行できたのは何よりであった。

祭 文

本日ここ世田谷山観音寺において御来賓の皆様、御臨席と御遺族、戦友の皆様、御出席を頂き、第六十一回特攻平和観音年次法要を齋行するに当たり、謹んで在天の御英霊に申し上げます。

戦いが終わり、既に六十七年余の歳月が流れました今日、悲しい報告を最初にせねばならないことは、誠に残念であります。この一年、我々は本顕彰会の黒柱とも言うべき存在でありました山本卓真前会長、菅原道熙前副会長を相次いで失いました。阿氏は英霊の皆様、遺族として、あるいは戦友として、人生の後半を慰霊顕彰のために捧げてこられたことは、言うまでもありませんが、その誠実にして献身的な御努力は、傍らで見る者を感じさせるものであり、私ども後継に続く世代の者が、本会に賛同参加いたしましたのも、阿氏を中心とする誠に美しい活動振りに心を打たれたこと、かつ、戦没者を顕彰する本来の国としての努力が、戦後久しく続いた左翼的症候群の社稷の中に埋没されたにも拘わらず、一部の心ある人々の努力で、規模は問わず管々と継続されてきたことへの感動を持ったことによります。重ねて、御両氏の御冥福をお祈りするとともに英霊の皆様、続く

世代の我々がしっかりとこの事業を継続して参ることを謹んで御報告するものであります。

さて本年は、オリンピック、パラリンピックの年でありました。東日本大震災の後遺症がまだ癒えぬ中、我が国の若人は立派に活躍し、沢山の感動をもたらしてくれました。ともすれば、不本意な出来事の多い中、一脈の曙光を感じたものでした。しかし、政治、外交の分野では、戦後の復興を成し遂げた世代の高齢化、少数化とともに、大変な難局を迎えつつあります。北方四島、竹島、尖閣諸島の領土問題は、国民の大多数が考えている方向とは違う、腰の定まらぬ対応が続いております。与野党が党利党略を優先し、本来あるべき国家として「誇り高き政治理念を」欠くが故に、国際的地位を失墜していることの影響は、決して小さくありません。前例を見ないオリンピックにおける韓国選手団の行動、我が国大使に対する北京市内での理不尽な行動、及びこれに対する我が国の対応は、国際常識から見れば「異常に弱腰の国」とさげすまれることの影響を恐れるべきであります。67年前、英霊の皆様が、将来の日本斯くあるべし、と考れば、誠に申し訳ない事態と云うべきでありましょう。

一般に慰霊行事は、没した人々への哀悼の誠を捧げるものであります。最も重要なことは、神と成り、仏と成られた皆様、この現世の有様を満足して見ておられるかどうかを、高い次元から推し量り、現代に生きる者が、これではいけないと自戒・自励の原点に立つところにその本姿を求めべきなのであります。このような観点から見た場合、20歳前後で散って逝かれた皆様が、夢に描かれたであろう「日本の清らかさ、高さ、尊さ、美しさ」が咲かせて欲しかった花は、薄っぺらな経済的繁栄、自己利益中心主義ではなく、誇り高く、香り高く、諸国民に感動を与えられる花であったはずであります。この御霊前に参集した私どもは、皆様の万感の念に想いを馳せ、少しでも誇れる社会の回復を目指して微力を尽くす所存であります。

時の流れは非情にして、皆様を弔い誠意を尽くして来られた御遺族、戦友、同輩の方々も、年と共にその数を減らしてまいりました。しかし、続く世代の私どもも、尊い犠牲性と、英霊の皆様方が夢に描かれた美しい花を今一度思い出し、民意振作に努めることをお誓いし、祭文といたします。

平成二十四年九月二十二日

公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長 杉山 蕃



梵鐘点打



特攻観音堂内における神儀



理事長代理・祭文奏上

やがて定刻14時、鐘楼での梵鐘3打で年次法要は始まった。打者航空自衛隊の故松本武仁氏である。松本画伯は、戦後独学で絵画を勉強し、戦没者慰霊のため数十点の絵画を制作された。それらの絵画は、靖国神社の参道や特攻平和観音年次法要などで展示し、多くの人々に感銘を与え、賞賛を受けていたが、平成14年3月31日に松本画伯が逝去されたことなどにより、展示が取り止めとなっていたものであるが、特攻戦没者の慰霊顕彰と、併せて松本画伯の慰霊とその御遺志を継ぐため、今後とも展示を続けたいと考えている。

法要準備作業は、各部署担当部長の指導の下、着々と進められ、昼前には完了した。特攻観音堂前には沢山の美しい季節の花を盛った供花が並べられ、お堂の向かって左側にある故吉田茂元総理大臣の筆になる「世界平和の礎」の碑が一段と重厚さを加え、特攻勇士達の偉業を想起させられた。英霊の方々が身を捨てて守ろうとしたこの国、この民族、この家族、引いてはアジア諸国の独立と平和、正にその尊い礎となられたのである。ビルマ(現ミャンマー)の初代首相バー・モウ氏も「特攻隊は世界の戦史に見られない愛国心の発露であった。今後数千年の長期にわたって語り継がれるに違いない」「カミカゼの精神、それは新しい東アジアの真の基礎となりつつあり、いかなる敵も打ち破ることのできない自己犠牲の精神、勝利のために死をいとわない精神である」「神風の精神が減びない限り東アジアも決して滅びない」と述べている。誠に、特攻精神こそ、我が国のみならず、東アジアの、そして世界の「平和の礎」なのである。

法要式典開始時刻のかなり前から参列者が続々と参集し、境内の各所で再会を喜び合い、談笑する姿が見受けられた。

法要式典開始時刻のかなり前から参列者が続々と参集し、境内の各所で再会を喜び合い、談笑する姿が見受けられた。

今年も年次法要は、世田谷山観音寺山主太田賢照僧正と地元の氏神・駒繫神社澤田浩治宮司の共斎による神仏習合で行われた。太田賢照山主の提唱により始められた神仏習合による法要も既に5回目となり、すっかり定着した感がある。神仏習合については、既に紹介されている(注2)が、神様と仏様を同様に崇拜するという日本人の持つ優れた融和の精神の表れである。既に世界平和運動の一環として進められているが、現在の世界の情勢の中で、イスラム教徒の国々とキリスト教徒の国々の対立、またその中でそれぞれの宗派の対立が、世界平和の大

きな脅威となっている。このような時こそ、融和の精神、和を尊ぶ心をもってお互いを尊重することが、その解決策の一助になるのではないか。松や樺、楓や桜などの大木が茂り、普段は静寂に包まれている世田谷山観音寺境内も、この日は午前中の早い時間から会員有志や奉仕の方々による受付準備や絵画展示等の作業、献歌のリーサル等で賑わっていた。絵画展示は、以前にも行われていたが、諸般の事情により一時中断されていたものを、今回、中江仁評議員の指導のもと、復活展示することとなった。絵画を描かれたのは、陸士61期生

の故松本武仁氏である。松本画伯は、戦後独学で絵画を勉強し、戦没者慰霊のため数十点の絵画を制作された。それらの絵画は、靖国神社の参道や特攻平和観音年次法要などで展示し、多くの人々に感銘を与え、賞賛を受けていたが、平成14年3月31日に松本画伯が逝去されたことなどにより、展示が取り止めとなっていたものであるが、特攻戦没者の慰霊顕彰と、併せて松本画伯の慰霊とその御遺志を継ぐため、今後とも展示を続けたいと考えている。

法要準備作業は、各部署担当部長の指導の下、着々と進められ、昼前には完了した。特攻観音堂前には沢山の美しい季節の花を盛った供花が並べられ、お堂の向かって左側にある故吉田茂元総理大臣の筆になる「世界平和の礎」の碑が一段と重厚さを加え、特攻勇士達の偉業を想起させられた。英霊の方々が身を捨てて守ろうとしたこの国、この民族、この家族、引いてはアジア諸国の独立と平和、正にその尊い礎となられたのである。ビルマ(現ミャンマー)の初代首相バー・モウ氏も「特攻隊は世界の戦史に見られない愛国心の発露であった。今後数千年の長期にわたって語り継がれるに違いない」「カミカゼの精神、それは新しい東アジアの真の基礎となりつつあり、いかなる敵も打ち破ることのできない自己犠牲の精神、勝利のために死をいとわない精神である」「神風の精神が減びない限り東アジアも決して滅びない」と述べている。誠に、特攻精神こそ、我が国のみならず、東アジアの、そして世界の「平和の礎」なのである。

隊倉形寛空曹長、補助者同じく上田中俊彦3等空曹の心を籠めた打鍾の音は、嫺々として森に飴し、参列者の心を洗う。

山主、神官ら特攻観音堂に入堂し、及川昌彦評議員の司会により肅々と法要は進められた。

参列者一同起立し、元海上自衛隊東京音楽隊員堀田和夫氏のトラベツト伴奏により国歌斉唱。続いて堂内では、祭主世田谷山観音寺太田賢照山主による願文奏上が行われたが、太田山主は願文の中で、特攻烈士の遺徳を讃え、「特攻勇士の諸霊は正に忠烈の龜鑑なり。諸霊が父母の恩愛を断ち、大忠、



保坂展人 世田谷区長挨拶

大孝、大義、大勇に徹せし崇高無比なる境涯に相到せんか誰か万斛の涙なきを得んや・・唯、諸霊を慰め得るもの一つあり、宇内に無慮一百三十有余の独立国家の新秩序の出現これなり。真に世紀の偉業。この赫然たるに匹儔するもの果たして他にあらんや。

これ正に諸霊の志の顕現なり。諸霊の血の発露なり。諸霊や、大仁にして大徳、大勇にして大善なり。故に諸士の霊徳や無量なり。諸士の光顔や巍々たり。諸士の威神や無極なり・・嗚呼尊い哉、嗚呼仰がんか哉、長存不滅の光。南無特攻平和観世音菩薩・」と、言を極め、心魂を傾注して奏上された。



献吟・吟 石橋一歌 笛 逢坂龍信

真に特攻勇士は、護国の鬼神となつて散華され、今や平和守護の観世音菩薩となつて我ら衆生を見守つておられるのである。

代わつて、駒繫神社(注3)の澤田浩治宮司祭主となつて神儀が執り行われ、修祓の儀・降神の儀・献饌の儀・祝詞奏上・玉串奉奠等の式典が、厳かな神楽舞曲の流れの中、清らかに齋行された。玉串奉奠の儀は、先ず太田山主に始まり、当慰霊顕彰会と御遺族の各代表により堂内において行われた。

次いで、堂前において祭文奏上が行われたが、やむなき事情で欠席された当慰霊顕彰会杉山蕃理事長の祭文(別



献歌・男性コーラス隊

掲)を衣笠専務理事が代読した。その中で、今年相次いで逝去された山本卓真前会長と菅原道熙前副会長を偲ぶとともに我々残された者達が慰霊顕彰の事業をしつかりと継続することを誓つた。

続いて御来賓の保坂展人世田谷区長が挨拶に立たれ、次のように述べられた。

「先の大戦において、本来なら長い人生の入口で、死を覚悟して短い生涯を終えられた方々に、心から哀悼の誠を捧げます。一人ひとりに親があり、兄弟があり、また愛する人がいたと思います。その全てを断ち、一命を賭して征かれたお気持ちを感じる時、言葉には言い尽くせない思いで一杯になります。愛する家族を念じつつ、国のためにと散つて逝かれた無念を思うと、胸が張り裂けるような思いです。残された御家族の御心痛は察するに余りあるものがあり、旧友の皆様のご追憶もまた一人のことと思います。私は、戦争で亡くなられた皆様の尊い犠牲の上に築かれた、戦後の社会に生まれた世代です。私達戦争を知らない世代に、当時の過酷な状況を語り聞かせてくれた先輩方の多くが鬼籍に入られました。こうして特攻平和観音に集い、静かに手を合わせる機会は誠に貴重なものだ」と



世界平和の礎 (吉田茂元総理書)



参列者焼香

感じます。それと同時に、更に若い世代にきちんと事実を伝えていくことが、平和な時代を長く享受している私たちの責務でもあると思います。

世田谷区は、「平和宣言都市」として、恒久平和を願う強い思いを掲げまします。戦争体験を語り継ぐ会も開催しています。区内在住の戦没者遺族の皆様



池中に立つ「夢違い観音立像」

と共に、福祉文化都市として歩んで参りたいと思います。

特攻平和観音年次法要の継続開催に尽力されている「特攻隊戦没者慰霊顕彰会」の皆様を始め、関係者の皆様の長年にわたる御活動に心から敬意を表したいと思えます。ここに、世田谷区民を代表して英霊に感謝の誠を捧げると共に、世界恒久平和を祈念して、追悼の言葉といたします。」

次いで、一誠流・石橋一歌氏の吟、逢坂龍信氏の龍笛により、特攻戦没者の遺詠二首が朗々と献詠された。

続いて、例年のように献歌合唱が行われたが、今年はまず冒頭に当慰霊顕



池前祭

彰会会員有志十数名の臨時男性コーラス隊(指導大穂孝子氏)が加わった。臨時編成ではあったが、リハーサルの甲斐あって、堀田和夫氏のトランペット伴奏により、献歌「加藤隼戦闘隊」と「同期の桜」の二曲を見事に歌い上げた。次いで、世田谷コールエーデ合唱団の女性コーラス隊(指揮大穂孝子氏)による献歌「ふるさと」の合唱が献奏された。雄々しく勇ましい男性合唱と優しく美しい女性合唱の声は聴く者の胸を打ち、英霊たちもさぞ、御霊安らかに唱和されたものと拝察する。

献歌の締めくくりは、堀田氏のトランペット吹奏に合わせ、全員で「海ゆか



直会風景

ば」を斉唱した。

次いで、当会代表・御来賓・御遺族を始め参列者一同祭壇前に進んで順次焼香を行った後、式衆一同退堂して池前に進み、池中に立ち給う「観世音菩薩・夢違い観音像」(注4)に向かつて朗々と『般若波羅蜜多心経』の声明並びに神官による祝詞の奏上があつて、滞りなく年次法要の幕を閉じた。

引き続き、15時30分から境内で直会が行われたが、初めに、福岡県偕行会会長菅原道之氏の御発声により、御英霊に対し献杯を行った後、各テントに参列者相寄り、約1時間、和やかに杯を交わして歓談した後、それぞれ来年の再会を約して解散した。誠に身も心も清められ、温められた一日であつた。(金子敬志記)

(注1) 特攻平和観音年次法要は、昭和27年5月5日、東京都文京区音羽の護国寺において、旧陸海軍関係者を中心に二体の「特攻平和観音像」(海軍は「神風特攻平和観音像」と称していた。)の合同開眼法要が営まれたのを第1回とし、以来61回目の年次法要とすることであつて、特攻平和観音奉戴以来60年、特攻平和観音像制作以来61年の歳月が経過したことになる。

本像は、終戦後、静岡市の清水寺住

職吉井成純僧正と日光山輪王寺塔頭華嚴院住職関口直大僧正が、大東亜戦争全戦没者の靈魂成仏を發願し、法隆寺に願ひ出て秘仏「夢違い観音像」を一尺八寸に縮小した像を制作し、平和観音像として奉戴することの許可を得、昭和25年10月10日に平和観音会を發足させ、会の趣旨に賛同する者にこれを頒布し回向することとしたが、現存が確認されているものは、本特攻観音堂の二体と、鳥濱トメさんによつて知覧の特攻平和観音堂に奉安された一体、及び昭和21年から平成18年まで61回にわたり長年執り行われてきた海軍神風特別攻撃隊戦没者の慰霊法要「神風忌」が営まれていた東京都港区芝の増上寺塔頭安蓮社に奉安されている一体の計四体である。

陸海軍各一体の特攻平和観音像は、昭和26年5月、先代の太田陸賢僧正により開山された世田谷山観音寺境内に都下仙川に在った元華頂宮邸の持仏堂を移築、特攻観音堂とし、昭和31年5月18日に落慶法要を営んで以来毎年法要を行つており、護国寺での開眼法要以来通算して今年、第61回目の年次法要を斎行することとなつた次第である。

なお、世田谷山観音寺では毎月の18

日、特攻観音堂において有志による内の月例法要を営んでいる。そして、大規模な年次法要は、毎年秋分の日の9月23日(又は22日)に営んでいるものである。

(注2) 神仏習合に関しては、平成21年11月発行の当会会報『特攻』第81号(2頁)に掲載したように、平成21年6月11日、高野山真言宗総本山金剛峯寺金堂において、近畿7府県の有名151社寺でつくる「神仏霊場会」(会長森本公誠・東大寺長老)の主催で「神仏合同国家安泰世界平和祈願会」が盛大に齋行されて以来、定例法要として年に1度、祈願会を催し、寺院と神社で交互に法要を営むことになつたとのことであり、同会は、明治維新の際、神仏分離による廃仏毀釈運動の起こる以前は盛んであつた、神仏を一緒に崇拜する精神風土を取り戻そうと、平成20年3月に設立され、世界平和運動の一環として、この運動を進めていくとのことであり、この傾向は、今後ますます盛んになるものと思われる。

(注3) 「駒繫神社」は世田谷山観音寺の北東約400メートルの下馬4丁目に鎮座します古社で、昔から付近一帯の鎮守様として尊崇されている。御祭神は大国主命、又の名を子の神、子の明神とも言い、五穀豊饒の神であ

るとともに、源氏ゆかりの武運の神でもある。その謂は、現在の社名が示すとおり、古くは源頼義、義家父子が奥州征討に当たつて武運を祈願され、その後、頼朝公もまた、藤原氏征討に際して、武運祈願のため参詣され、愛馬芦毛を社前の松に繫いだという故事に由来する(詳しくは、平成19年11月発行の当会会報『特攻』第73号4頁以下参照)。

(注4) 世田谷山観音寺境内の蓮池の中に立ち給う「観世音菩薩立像」は、法隆寺夢殿の「夢違い観音像」を模して拡大鑄造された菩薩像で、その胎内にも、特攻平和観音像の胎内に納められている、特攻勇士の靈璽簿の写しが納められている。夢違い観音とは、悪い夢(二度と経験したくないこと、思ひ出したくないことなど)を良い夢に変えて下さる観音様と信仰されている。

特集

特攻インタビュー(第8回)

海軍航空特攻

粕井貫次氏

(公財) 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
特攻ライブラリー取材スタッフ



粕井貫次氏

方がおられましたら、自薦他薦を問わず、当会事務局までご連絡下さい。」

粕井貫次氏軍歴(略歴)

第13期海軍飛行予備学生 海軍中尉
出水海軍航空隊国分遣隊 国分海軍航空隊(第一国分基地)
神風特別攻撃隊 乾龍隊

特攻ライブラリー取材班

(五十音順)

- 及川 昌彦 世話人
- 神崎 夢現 進行
- 倉形 桃代 記録
- 提橋 律子 世話人
- 須貝 智行 写真撮影
- 高橋 暢 映像撮影
- 須田 智歩 インタビュー書き起こし
- 長尾 栄治 インタビュアー・構成

◆海軍飛行予備学生に志願

粕井さんは海軍飛行予備学生13期生ということですが、海軍飛行予備学生とは、どういう制度だったのでしょうか。

粕井・海軍飛行予備学生は第1期生が入隊した昭和9年以来、10年以上続いた制度です。海軍では、海軍兵学校を卒業した正規の士官以外に予備士官と

いうのがありました。飛行科の場合、民間に飛行連盟というのがありまして、飛行操縦を勉強していた学生がいました。数十人くらいの数に過ぎませんでした。その人たちの経験を生かそうと、海軍が学生飛行連盟などに話をして、志願者があれば予備士官として採用しようということになったのです。海軍ですから商船学校出身の民間船舶の航海士、そういう人たちを海軍の予備役として編入する制度もありました。

廃止になるということで、同じ軍人になるならば早いうちに、それも昇進が早い……予備学生は最初から士官待遇ですから。それから、やはり飛行機に乗れるというのはその時分、かつこ良くてあこがれでした。それに海軍の制服もかつこ良かったですから、それで志願したというわけです。

志願された時は学生だったので粕井…私は4人兄弟の2番目ですが、兄と弟は体が丈夫で父親が工業学校に行かせたんです。私は兄弟に比べるとそんなに立派な体ではなかったのですが、「お前は商業学校に行け」と父に言われました。昭和16年3月、商業学校を卒業する時、働きながらでも、もう少し学歴を付けたくて夜学の専門学校に入ろうと思いました。私は大阪に生まれ、大阪で育ちましたが、当時の大阪には夜学の専門学校が2つしかありませんでした。関西大学の専門部と日本

大学大阪専門学校です。会社に近いです……近いといっても7キロほど歩きました。会社と学校と自宅の間を通いました。戦争が厳しくなり、もう軍隊に行こうと志願したので。専門学校を昭和19年3月に卒業する予定でしたが、繰り上げて、昭和18年

の雰囲気は、戦争ムードというのか、一國を挙げて米英と戦わなければならぬということ、学業の期間も繰り上げ卒業で短くなっていました。当時、大学や高等専門学校に徴兵検査を受け予という制度があり、徴兵検査を受ける満20歳になっても、兵役を免除されたのですが、そういう制度も間もなく

9月末卒業になりました。飛行予備学生に合格したので、結局、卒業を待たずに9月13日、三重海軍航空隊に仮入隊し、10月1日に正式の予備学生に任じられました。専門学校の卒業式には、私の代わりに親が参加しました。

——夜学に進学するほどですから、何か夢や目的があったのですか？

粕井…そうですね。満州国の行政官、専門学校以上を出ていけば、満州国の高等文官になる資格がありました。それから、今でいう司法試験ですね。あるいは、行政職でも高等文官行政職試験というのがありましたから、そういう試験を受けてみたいという気持ちがありました。それから、当時の新聞の人事欄に南方司政官というような…これは占領地域に対する行政に携わる職業だと思いますが、そういうものも非常に魅力的に映りました。

◆「五省」の思い出

——入隊後、理想と現実のギャップに悩まされたという体験談がありますか、粕井さんはいかがでしたか？

粕井…私の場合、それほどありませんでした。入隊前、昼は鉄工所の事務員勤めをして晩は夜学へ通う。毎日、長距離を歩かなきゃいけない。食糧事情も良くありませんでした。それに比べ、

海軍では食料がとて豊富というか、足りていましたし、運動もできますし、体力がモリモリついてくるのが自分でもわかりました。あつというまに3キロばかり肥えました。運動選手だった者は食料が少なくといって体重も減りましたけども、私の場合は規則正しい生活をしたし、それから勉強も…：：：座学というやつですね、これもできました。だから、精一杯がんばって自分の力が発揮でき、かつ認められるということで理想と現実の間で悩んだということはありませんでした。

——予備学生としての生活や訓練はどのようなものだったのでしょうか？

粕井…夏と冬では少し違うでしょうが、朝6時前後に起床、それから洗面、集合、体操です。それから朝礼があつて、別科があつて、いろんな座学もあれば体技もありますし、それが午後4時ごろ終わりまして、それからまた別科で体技とかいろいろあつて、夜は温習、いわゆる自習時間です。そういうふうな規則正しい生活で、夜は9時か9時半ぐらいに巡検といって、日直将校が各隊を検分して回つて、そのあと就寝という非常に規則正しい環境でした。

——入隊から飛行機に始めて乗るまで、どのくらいかかったのですか？

粕井…昭和18年9月に入隊して、乗っ

たのは翌年の昭和19年1月ですから、4カ月ぐらいですか。

——その間は、ひたすら基礎教育ですか。

粕井…はい。体育だと、まず基本的に駆け足ですね。それから相撲をやりました。それ以外にカッター…：：：短艇、ボート漕ぎです。それから手旗信号。それからトンツ…：：：通信の発信受信。それと海軍士官としての一般的な教養や心得…：：：特に、指揮官としての心構えというようなことについて徹底して仕込まれました。

——短期間で海軍魂を入れるため、鉄拳制裁が当たり前だったという話もありますか？

粕井…同じ飛行予備学生でも、土浦航空隊と三重航空隊では大分、違うみたいです。土浦は当時の飛行長がスパルタ教育をやったようです。ところが、三重海軍航空隊の方は寝る所がベッドでした。土浦はハンモックでしたが、

それから、トップに立った教育主任の田村中佐、その後、長谷川という名前に変りましたけど、この方が非常に温厚ないい方で…：：：100歳ぐらいまで生きられましたか。慰霊祭には毎回お越しになりました。それから、教育主任補佐官の国定謙男少佐が立派な人でした。この方は終戦になって、自分

の教えた学生がずいぶん戦死した、この責めを負わなければならぬというところで、終戦直後の、確か昭和20年8月23日ですか、自分の菩提寺に奥さんとお子さんたち2人を連れて、子どもたちにもキヤラメルを与えて拳銃で撃ち、奥さんも拳銃で撃ち、ご自分は割腹自殺された。それぐらい立派な方でした。そういう立派な方たちの言動に対して、私は本当に惚れ込んでおりました。いわゆるイジメとか嫌がらせなどは、ほとんどと言つていいくらい受けたことがありません。

——三重での教育期間で印象に残っていることは何かありますか？

粕井…夜の温習、いわゆる復習時間が特に印象に残っています。「五省（ごせい）」という5つの反省をやるわけです。当番の学生が、全員の目をつぶらせて静かにさせた後、五省を…：：「一、至誠に悖る勿かりしか。一、言行に恥づる勿かりしか。一、氣力に欠くる勿かりしか。一、努力に憾み勿かりしか。一、不精に亘る勿かりしか。」…：：これを1つずつ区切って唱えるんです。夜、シーンとした中で、それを唱えると、非常に…：：後に、私は趣味で催眠術やったことあるんですが…：：脳の表面の、新しい脳の皮質が麻痺した状態で、潜在意識に軍人精神が注入



海軍飛行専修予備学生として入学当時

されるといふような、そういう時間を持つわけです。「ああ、おれはまだまだ努力が足りなかった」とか、「まだまだ気が足りなかった」とか、「もっとベストを尽くすべきだったな」とことを、毎日、反省を繰り返しながら向上していったわけです。

—— 柏井さんにとって海軍生活は、ご自分の性格に合っていたようですね。柏井…合っていたというか、入隊した時、私はまだ19歳ですから、非常に純真というか…。私は、どちらかといえば、すぐ何かに惚れてしまう方なんです。非常に感化されやすい性分なのでしょうか。例えば、戦前、吉川英治の『宮本武蔵』を何回も読んでみたり、谷口雅春先生の書かれた『生命の實相』あたりを何回も読み直したりして、精神的な向上を出来るだけ目指そうとしていました。だから、最も素直な、純真で若かった時代ということがいえるでしょう。

◆水上機の操縦

—— 飛行訓練が始まった頃のことを教えてください。

柏井…私の兄が、川西航空機という飛行艇や水上機を製造している会社の技術者で、戦時中、北浦海軍航空隊(現・茨城県潮来市)で水上機の整備をしていました。そういうこともあって三座水偵…3人乗りの水上偵察機の操縦を希望しました。他の人は大体、戦闘機を希望しましたね。水上機希望者が少なかつたせいも、希望通り、水上機操縦の練習航空隊だった博多航空隊に転勤になりました。

練習機教程で最初に飛行機に乗る完熟飛行というのがあります。下士官の教員に乗せてもらって離水するわけですが、エンジンが回ったと思うと水柱というか、すごい波が立って、飛行機が動き始めると、もう波しぶきがいっぱいでしょう。波の抵抗に対して、操縦桿やフットバー(方向舵)をパッパッパと修正しなければいけない。それが神業のように見えるわけです。アツと思うと、もう水面が下の方になつてくる。「うわ、こんな神業みたいなことが果たして俺に出来るんやろか」と思って最初はびっくりしました。しかし、それも慣れて、そのうちに人並

みには何とかやれるようになりました。—— 水上機の操縦方法は独特なのですか？

柏井…上空では地上機とほとんど一緒ですが、水上機の場合はフロートがついていますから空気抵抗があります。宙返りなどの特殊飛行でも、陸上機の方がスピードがつきやすいですから楽です。

一番違うのは離水と着水です。離水する場合、水上機というのは、エンジンを入れるとまず機首が上がるんです。そして、スピードがついてくると機首が下がります。ところが、あまり下げすぎると波頭にフロートが突っ込むと危ないわけですから、適当な角度で加速しなきゃいかんわけです。そして最後に、まさに離水する直前にフロートをちよつと、おしりをピュッと上げるんです。ということは操縦桿を前へ倒すんです。そうするとおしりが上がって、スーツと上がっていくんです。ところが陸上機は、エンジン入ると、だんだんとスピードがついてくる。と機首が下がります。そのままの上昇の角度そのままです。そのままでいいんです。だから水上機に比べて陸上機はものすごく楽です。

それから着陸の場合、水上機は波とかうねりにフロートを取られてはいけ

ませんからダウンの格好です。マイナス3度ぐらいの角度で降りていくわけです。そして15mのところではエンジンを絞って、だんだんと機首を上げて、一番機首が高い失速直前のところでチャットと着水するわけです。これが水上機です。ところが陸上機はそうではなくて、ずっと高いところからパス姿勢で入る時にはアップ、たしか1度ぐらいだったと思います。このままの姿勢で降りてくるわけです。そして航空母艦の艦尾、軽い飛行機の場合5mです、5mのところではエンジンをいっばい絞って三点着陸です。水上機は失速寸前までこうアップする。陸上機は三点着陸ですから、陸上機のほうが楽です。それから陸上機の場合は、いわゆる着陸誘導板というのがありまして、それが赤と白の平行線が一直線に見えるようにエンジンをふかしたり、しぼったりしながら降りていけばいい。水上機の場合はそういうものはありません。海の上ですから。だから非常にそういう点は難しかったです。

—— 飛行訓練には練習機教程と実用機教程がありますが、練習機と実用機では操縦方法が違いましたか？

柏井…昭和19年4月、博多での練習機教程を終え、実用機教程は四国香川県



零式水上偵察機

た。詫間には零式水上偵察機がありま
した。零式水上偵察機には練習機にな
い水中方向舵があるんです。練習機で
はエンジンと感覚だけで水上を滑走し
なければいけない。ところが、水中方
向舵があると非常に方向転換がやりや
すい。それから実用機になりますと飛
行機のプロペラの角度を変えるわけで
す。離着水するときにはローピッチにし
て、巡航速度になるとハイピッチにす

るわけです。それから、エンジンの温
度、筒温を上げすぎず、下げすぎない
ために、エンジンカウリングを開いた
り絞ったり。それから、着水離水する
ときフラップを上げ下げする。練習機
と比べて、そういういろいろな操作が
ありました。

——お話を聞いているだけで頭が混
乱しそうですが、そういうのは、訓練
で自然と覚えられますか？

粕井…そうですね。練習機の時誘導
コースを回る時間も短かったです、
実用機で飛ぶ場合は長い距離を飛ぶわ
けですから。あわてて操作しなくても、
順番にやっつけていけばいいわけです。だ
からむしろ、長距離の場合、安定した
実用機の方が楽です。特に、実用機教
程で使った九四式水上偵察機というの
は…：ガダルカナル攻撃にも使った三
座の水上偵察機ですが、上空での操縦
性能が非常に安定していましたから、
そういう飛行機だと手を離していて
も、ひとりでに楽に飛んでくれました。

——水上機の場合、どのような訓練
が中心だったのでしょうか？

粕井…水上機は長距離偵察が重要な任
務ですから、訓練では計器飛行が非常
に重視されました。天候不良とか夜間
の場合には計器飛行の技術が非常に大
切ですから。それから潜水艦攻撃です。

「潜爆」と言っていました。潜水艦に
対して、30度くらいの緩降下爆撃を行
います。空母などから出撃する艦上爆
撃機は、急降下爆撃と言って、45度以上
で突っ込みましたけど、私たちの場合は
30度の角度で潜水艦攻撃をやりました。

それから夜間定着。これが怖いんで
す。陸上機の場合、夜間でもライトの
先ほどに着陸誘導板（誘導灯）という
のがあるから進入角度がわかるわけで
す。ところが水上機の場合、そういう
ものがありませんから、高度100m
からアップ2度からアップ3度ぐらい
の姿勢で速度プラス10ノットか15ノ
ットでもってエンジンを絞りながら、そ
のままずっと降りてくるわけです。そ
してフロートが海面に着いたとたん
に、エンジンを絞って操縦桿をゆっく
り引くわけです。だから、非常に手探
りで、特に海面が暗くて見えにくい時
は危険が伴いました。

——水上機は、すべて二座（二人乗
り）か三座（三人乗り）なのですか？
粕井…いや、一人乗りの単座もあるん
です。零戦にフロートをつけた二式水
上戦闘機というのがありましたし、そ
れ以外に、「強風」という水上戦闘機
がありました。二座の場合、前が操縦、
後ろが航法と射撃です。三座の場合は、
前が操縦、真ん中が航法、後ろが通信

と射撃です。そういう役割分担があり
ました。

——三座以外に、二座の水偵にも乗
られたのですか？

粕井…いや、私は二座に乗っていませ
ん。三座しか乗りませんでした。練習
機は二座でしたけど。私が操縦した飛
行機は、赤トンボの水上機と陸上機、
三座水偵の零式三座水偵と、九四式水
偵ですが、風防のない吹きさらしの赤
トンボの方が気持ち良かったですね。

——風防のある飛行機の方が楽だと
いうイメージがありますが？

粕井…バスを運転するのとオートバイ
で走ると、どっちが楽しいかという
のと同じです。私はオートバイの方が
楽しいと思うんです。ビューっと風を
切り、運転してるぜという実感があり
ますものね。例えば、新幹線の技術は
すごいし、時速200kmで、あの長い
車両を運転する満足感はあるでしょう
が、それよりも、昔のチンチン電車の
ような、ドアもなく風も吹きさらしと
いう、その方がやはり運転する醍醐味
があると思います。

——練習機、実用機の訓練課程が終
了すると、いよいよ実戦部隊に配属さ
れるわけですね。

粕井…はい。私は一番先に決まりまし
て、隊長に「アラフラ海の近くのアン



九三式水上中間練習機



九四式水上偵察機

ボンという航空隊に決まったぞ」と言われ、皆が「おめでとう」と胴上げしてくれました。ところが、アンボン航空隊がどこにあるのかわかりません。地図で調べたら、ニューギニアの近くでしょう。「うわ、えらいところになったな」と。まだ71〜72時間しか乗っていないから自信がなかったんです。他の連中は大津に行ったり、詫間に残ったりと他の転勤先が決まるでしょう。うらやましいですよ。休みの日には家に帰れる者もいるし。ところが、私のアンボン航空隊行きが中止になりました。

した。というのは、アンボン基地の飛行機がほとんど壊れてしまったんです。で、今度は転勤先がなかなか決まらな。やっとなったのが、練習航空隊である九州の出水海軍航空隊国分分遣隊で、しかも陸上機の教官、それも練習機……九三式中間練習機、赤トンボの教官です。ちょっとガツカリしました。

◆海軍士官としての勤務

——国分に赴任されたのはいつ頃で

したか？

—— 粕井…昭和19年7月です。

—— その時の階級は？

—— 粕井…階級は少尉です。

—— 飛行予備学生は、階級がどのようにならうか？

—— 粕井…第13期の平均的な飛行予備学生は、昭和18年9月に入隊して、昭和19年5月21日、少尉に任官しています。卒業は昭和19年7月……水上機の方が他の機種よりも卒業が早かったです。あれは、どうしてですかね。私は昭和19年7月卒業ですが、他の連中は9月に卒業しています。

—— それから、昭和20年6月1日付けで中尉に進級です。ただ、土浦航空隊に入隊した者の中には前期・後期というのがあったらしくて、その中の一部には入隊してから6ヶ月で中尉になり、それから9ヶ月で中尉になった者がいたそうです。だから、終戦の時、特別昇進で大尉になった者もいるように思っています。

—— 三重空でも、同じように前期・後期と分かれていたのですか？

—— 粕井…三重空ではごく一部、前期があったようです。だから、基礎教育2ヶ月で実用機課程へ行った連中がごく一部あったように思います。

—— 粕井さんは後期の方だったわけ

ですか？

—— 粕井…そうです。

—— 地上機の教官として国分分遣隊に赴任されたわけですが、その時、初めて地上機に乗ったのですか？

—— 粕井…はい。

—— 簡単に乗り換えられるものなのですか？

—— 粕井…そうですね。違うのは離陸と着陸です。水上機の場合、着陸は出来るおしりを下げるでしょう。陸上機は三点着陸ですから、着陸の時間におしりを上げすぎまして尾輪のゴムを2回ばかり切りまして、ちょっと恥ずかしい思いをしました。

—— 士官としての勤務、それも教官ということ、緊張したりしましたか？

—— 粕井…着任してすぐ、甲種飛行予科練習生12期の飛行練習生を受け持てといわれまして、1週間ばかり受け持ったことあります。彼らは中間練習機課程を終えて、もうすぐ実用機課程へ行く直前ですから、50時間ぐらい乗っています。私は水上機を入れて70時間です。だから陸上機の操作は私より上手いんです。「飛行後の注意をお願いします」と言われても、「いや、なかなか今日はいままでか」とか言って（笑）。そんな経験があります。その後、甲飛

13期で第39期飛行練習生の操縦を最初から教えました。

——予科練出身の若者の印象はどうでしたか？

粕井…かわいかったですね。3歳ぐらい年下、ちょうど私の弟ぐらいでしたから。非常に素直で真面目で探究心旺盛で…。海軍では下士官が彼らをイジメまして、バッテリーでどついたたりして、それを取り締まるのに苦労しました。

N…予科練生が下士官からイジメられたのですか？

粕井…下士官にもいろいろあって、甲飛というのが一番、出世が早いわけです。その次が乙飛（乙種飛行予科練習生）、それから丙飛（丙種飛行予科練習生）といって一般兵科から飛行科へ変わった連中もいるわけです。そういう連中は、甲飛の連中があつという間に自分たちを追い抜いて偉くなっていくでしょう。それに対する嫉妬というんですか、そういう理由でイジメるんです。

——粕井さんも予備学生で正規の教育を受けた士官というわけではありませんか。そういう点で、イジメのようなものにあつたことはなかったのですか？
粕井…私はありません。というのも、最初に配属になった出水海軍航空隊国分分遣隊には中尉以上が6人しかいま

ませんでした。あと、我々、少尉でしよう。海軍兵学校出身者というのと、分遣隊長と司令と飛行長ぐらいのもので、分隊長が1人いましたが、予備学生の方です。だから、兵学校出からのイジメというのは経験していません。

——部隊には海軍兵学校、予備学生、予科練など、いろいろな出身の方がいたと思いますが、それぞれ特徴のようなものはありましたか？

粕井…兵学校を出た人、特に、大尉以上の我々より格が上という人たちは、やっぱり立派な人が多かったんです。下士官、特に出世の遅い下士官の中には、上の言うことをあんまり聞かないで、自分勝手なまねばかりするという乱暴なのがありました。甲飛出身の下士官教員に私は会っていません。私たちの部隊では乙飛出身の人がほとんど、乙飛か丙飛出身でした。

——予備学生はどうでしたか？

粕井…予備学生は、やはり、娑婆気が抜け切れないというか。その分、仲間意識も強かったです。例えば、飛行機が不時着するでしょう。そして、指揮所に報告するわけですが、指揮所から見ていると、「おい、あいつ知つてるか」「ああ、知つてる、知つてる」と報告した奴に、「おい、なんで降りたんや」と言うと、「いや、エンジンの

調子悪いねん」「よっしゃ、なら整備に言うとかくから、今晚泊まらんか。」となるわけです。「先任将校は誰それやから、ちゃんと挨拶しとけよ」とアトバイスしたり、我々が主計に頼んで宿泊の手続きをしてやるとか。同期生が全国に5000人おられますから。だから、どの航空隊でも10人や15人くらいはいるんです。だから、非常にツーカーで行くんです。ところが、兵学校出の少尉か中尉が降りても、「おい、知つてるか」「知らんなあ」……。そうなるのと、その人は、まず、先任将校を探して挨拶しなければいけないし、整備長にきちんと整備のお願ひもしなければならぬ。泊まりとか、いろいろ手続きを自分でお願ひしなきゃいかんということで大変なわけです。そういう点、仲間が大勢いるということは、すごく力になります。

——国分分遣隊に着任した時、粕井さんはおいくつだったのですか？

粕井…20歳です。昭和19年9月、武田少佐という艦爆乗りの方が分遣隊長兼飛行長として着任しました。着任早々、もの凄く剣幕で「こんな、むき出しの兵舎や木造建物は泥の中に埋める！」と言っています。戦地から帰還したばかりで、アメリカ軍の空襲を経験していただきますから空襲の対応を訓示したわけ

です。武田少佐の着任から間もなく、分遣隊は航空隊に昇格して、国分海軍航空隊となりました。武田少佐は副長兼飛行長になり、安田中佐が司令として着任しました。この安田司令という方が、鉄拳制裁、バッテリーなどの罰直は「もつてのほか」という方針でした。分隊長は前田大尉という兵から大尉まで上がった方で、「私は学問がありませんから、分隊長よろしくお願ひします」と言つて、精神訓話などを任せてくれました。海軍では、祝日などに精神訓話をしなければならぬ。例えば天長節、今の天皇誕生日です。その時には天長節にふさわしいものを。また、紀元節、建国記念日ですね。その時には、日本の歴史を題材にした話というように、祝日のたびに精神訓話をしなければならぬ。私は話すことには慣れていたので、分隊長の代わりに、100人くらいを前に1時間近く精神訓話をやったりしました。そういう経験は非常によかったです。

——国分航空隊には、教官の数はどれくらいだったのですか？
粕井…士官だけで15、16人くらいいたでしょう。他に下士官教員がたくさんいました。

——学生の数はどのぐらいでしたか？

粕井…私を知っている範囲内で、飛行予科練習生が200人です。

——教官1人で何人の練習生を受け持つのですか？

粕井…大体、4名ないし5名です。私は単独飛行が遅くなった連中を受け持つてくれと言われ5名受け持ちました。練習生の中には下士官にイジメられて萎縮する者がいるわけです。上空へあがってから操縦桿を抜いて、教官席がある後ろから前の操縦席の頭をどつてみたり、ひどいことする奴がいるんです。そういう下士官教員に習うと萎縮するんです。それを、のびのびと操縦させる習慣づけをしなければいけません。

——国分航空隊の組織を教えていただけませんか？

粕井…2つの飛行分隊があつて、分隊長がだいたい大尉です。その下に、私のような少尉や中尉の分隊長が何人かいます。それから下士官教員が10人ほどいる。そして練習生が100人ぐらいいて、1個分隊になっているわけです。練習生は班に分かれます。1班で12〜13人くらい。班に食卓があつて、寝る時には梁と梁の間にハンモックをぶら下げて、そこで寝るといふ形です。

——国分航空隊の教官時代はどのぐらい続いたのですか？

粕井…昭和19年7月に着任して、昭和20年1月に特攻隊編成になって……。

それから確か、4月まで熊本県の人吉航空隊で特攻訓練やりました。それから四国の観音寺に行きまして、観音寺で4月から7月まで特攻訓練をまたやつて、そして、訓練が一応終わりということになって、7月に九州の大部分と国分に分かれて特攻出撃配置ということになりました。

——教官時代、最も記憶に残っていることは何ですか？

粕井…下士官教員と親しくしながら節度を保ち、なおかつ、どのように彼らを引っ張っていくかということですね。彼の方が若いですから。私も若かったけど、彼らはもつと若い。中には年長の下士官もいましたけど。

私の部屋は練習生宿舎の一室でした。普通、士官は士官用の建物にいますが、私は士官としてただ一人、練習生宿舎に住んでしました。准士官に進級した飛曹長と同室で、飛行長から、「士官としての心得を教えるように」と頼まれましたが、彼は准士官になって外出の制約がなくなつたから毎晩のように外泊するわけです。私はちゃんとした教育訓練をするなら、自分がキチンとしていなければならぬと考へて、2ヶ月ほどまったく

外出しませんでした。

夜に一人していると、下士官からたまに、「一杯飲みませんか」と誘いが来るんです。彼らは下士官教員室で飲んでいるんですね。3回に1回はお付き合いしない、やっぱり具合が悪い。それで一緒に飲むと地が出るんです。中には、「後ろから、編隊飛行で噛み付きませ」という奴がいる。「それぐらいの度胸あつたら、いっぺん噛み付いてみる」と言い返すわけです。それくらいガンとやらないといけない。大体、絡んでくる奴は進級が遅れている奴ですね。兵長で下士官教員の配置についているけど、なかなか二等飛行兵曹になれんとか、二等兵曹の奴でも他の連中はもう一等飛曹とか上等飛曹になつていたりとか、そういう奴です。そういう奴には頭からガンとやらないと。

それと、やはり、こつちに実力がなるといけない。だから、先ほどの精神訓話もそうです。それから学科もそう。私が学科を教える時、廊下で講義を聞いているんです。「どんな講義をしようんや」と。だから、私も絶対にひけをとつてはいけないということ、1時間しゃべる時には2時間も3時間も予習して。赤本という軍隊の規則とか軍極秘とか、赤表紙の本があります。それは、士官だつたら借りられますか

ら、それを借りて、ダーっと読んで。あとは、やはり言行一致ということですね。今から考えたら、私もずいぶんと面映いような行動があつたと思うんです。一挙手一投足、俺を見習えと。軍人はどうあるべきかと思つたら俺を見ろという気持ちでやつたわけです。だから、2ヶ月も外出しなかつたんです。先ほどお話しした国定少佐とか、三重航空隊の五分隊の分隊長しておられた石井分隊長とか、そういう立派な人を見ているでしょう。だから、「ああ、士官というものは、ああでなければならぬ」という気持ちはものすごく強かつたです。

◆「赤トンボ」特攻隊の編成

——国分航空隊時代は日本の敗色が強くなつた時期ですが、燃料不足などで、訓練が滞つたりしたのですか？

粕井…昭和20年1月、一般的な飛行訓練を続けるには機材も燃料も足りないということ、200人の中から100人だつたか……下士官入れて200人に絞つたか、ちよつとあいますが、その絞つた人数で限られた燃料で集中して特攻が行えるような訓練をせよということで特攻隊編成になりました。特攻配置以外になつた連中は、すべて搭乗員配置から外されて各

基地の穴掘りとか、そんな仕事に従事しました。

——その特攻隊編成の命令で、特攻がはじめて身近なものになったのですか？

粕井…そうです。それまで、いろいろと聞いてはいました。関行男大尉が亡くなったり、その前後に何機か特攻出撃があったということは聞いていますが……。普通は、相当、練度が上がっ



国分海軍航空隊の分隊士達
(中央が粕井さん)



特攻訓練中の粕井さん

ている実施部隊の中で特攻に行けですよね。ところが、我々の場合は訓練効果を上げるために、選別した連中に対して、集中して特攻訓練を行うということです。それが昭和20年1月に始まったわけですよ。

——特攻隊編成の命令を受けた後のことを教えてください。

粕井…私は、その前に内示を受けて、練習生100名の中から25名を選びました。操縦技術優秀で、なおかつ長男でない次男、三男で、いつ特攻で戦死しても家系が絶えない人を選べと言われました。

N・粕井さんは、選んだ練習生にどのように伝えたのですか？

粕井…まず、候補者を名簿で出して、その後、全員を集ませ、「今から特攻編成を行う」、「メンバーは今から読み上げるから、その者は一歩前へ出る」と言いました。だから、本人たちはその時まで知らないですわな。雰囲気として、薄々、わかっていたでしょうけども。名簿に載っていない練習生は搭乗員、搭乗配置から外されましたから、皆、「予科練じゃなしにドタレンヤ」、「土方のドタレンヤ」と言いましたね。それから士官は皆、方々の航空部隊へ転動になりました。それと当時、「空地分離」という管理方法になったんで

す。「空」というのは搭乗員と航空機を整備する最低限の整備員。それは飛行機と一緒にあちこち行くわけです。「地」というのは、基地の営員ですよ。

——このように、今までみたい空地の要員が一体になって異動することが出来ないわけですよ。だから、「空」だけは戦局に応じて、あっちこっち迅速に異動できるような体制になったわけですよ。

——特攻隊編成になると、それらしい名前がつけられたのですか？

粕井…はい。私たちの場合は、「神風特別攻撃隊・乾竜（けんりゅう）隊」です。一緒に、「坤竜（こんりゅう）隊」も編成されました。「乾坤一擲（けんこんいつてき）」から取ったものです。後に国分と大分に分かれた時、「乾竜隊」は国分に、「坤竜隊」は大分に配置されました。

——特攻訓練は具体的に、どのような訓練だったのですか？

粕井…夜間の離着陸。それから、観音寺の沖合い約10kmのところ、円上島という小さな島があるんです。それに向かって編隊で飛んで行って、島の上に着陸した時、照明弾を落とすわけですよ。照明弾が落ちたら島が明るくはつきり見える。それに向かって突入する訓練です。突入して引き起こして、そのまま基地に戻ってくる。これが基本的

な訓練です。だから夜間飛行、それから急降下爆撃、緩降下爆撃、そして夜間の着陸ですよ。

——サングラスをかけている写真がありますが、普段、使っていたのですか？

粕井…夜間飛行をする場合、出来るだけ視野を良くするために、夜、真っ暗なところで山の稜線を見たりするわけですよ。普段、昼の明るいところの目に慣れてしまうと、夜間は非常に見えにくいんです。むしろ、昼はあまり日向に当たると、明るいところに行く時にはサングラスをかけて、出来るだけ瞳孔を開けないようにしておくと。毎日そういうふうには自覚して訓練すると、なかなか見えなかった夜の山の稜線なんか、かなり見えるようになります。

——特攻訓練には、何かマニュアルとか教本があったのですか？

粕井…いや、マニュアルなんかありません。経験の積み重ねです。中練特攻でしょう。赤トンボで特攻するわけですからね。破風張りの赤トンボに果たして爆弾を積めるかどうかということからですもの。零戦特攻だって250kgなのに同じ爆弾を積もうといふんですから。私は体重が軽い方ですから、「軽いお前が乗れ」というわけ



九三式陸上中間練習機

で最初に乗りました。250 kg爆弾の信管を外して離陸と着陸の訓練をするわけです。それから、後ろに1人乗せるとか、そのうち体重の重い奴も乗れると。そういうことで、飛んでから上昇、降下、着陸、それから、どの程度、急旋回が出来るかとか、そういうことを我々自身でやってみました。

変わった実験訓練として飛行中の固定操縦装置の利用がありました。一緒

に連れて行った練習生は、まだ40〜50時間しか乗っていないから練度が低く、失速したり、機体の姿勢が判らなくなると墜落してしまうわけです。実際、そういう事故が何回も起きました。それで、操縦席の前と横の二方向から操縦桿にフックをかけて、操縦桿を中正に固定するわけです。練習機は安定した飛行が出来るように設計されています。機体が少々、変な姿勢で飛行してもエンジンの動きが正常で、舵も中正の位置にあれば何百mか落下しますけど、そのうち水平飛行に戻ってくれます。だから、高度さえ十分にあれば失速などで墜落することはなくなつたわけです。沖縄への長距離飛行では全機にこの装置をつけようとか、途中の南西諸島の島々に誘導燈を設置しようとか、そんな幼稚とも言えない原始的なアイデアも浮かびました。

——練習機に爆弾を積んで飛行するというのは思ったより大変だったのですね。

粕井：そうですね。九三式中練はスロットルレバーが0から10まであります。6か7ぐらいでスピードがついて上昇して、水平飛行に移る時には3・3か3・5ぐらいに戻すわけです。ところが、250 kg爆弾を積むと10まで押し

んです。上がった後、普通の上昇のレベルである5ぐらいまで絞ると、今度は飛行機が沈むんです。普通だったら、どんどん上昇するぐらいまでスロットルレバーを開けておかないと水平飛行が出来ません。旋回する時も背中に重い荷物を持っている感じで、「ヨイシヨ」という感じになる。元へ戻そうと思っても、なかなか戻らないんです。

——爆弾を積んだ状態だと、時速何kmくらい出るものなのですか？

粕井：75ノット弱です。75ノットというキロに直すと140 kmですか。

N・赤トンボで特攻に行くことに不満はありませんでしたか？もう少し新しい機体で行きたいというお気持ちはありませんでしたか？

粕井：うちの隊長も、もう少しいい飛行機をもらえるように技術の向上を図ろうじゃないかと言っていました。オノボロでもいいから戦闘機あたりでももらえないかと。その技量に達するよう早く技量を磨こうじゃないかと。

ところが、これは噂で聞いたのですが、台湾から出撃した中練特攻が大成功したんです。なぜ成功したかというと、敵はその飛行機を140ノット出ていると思っただけです。ところが、実際には75ノットか70ノットしか出てないわけです。だから、弾が

全部、前の方をかすめていった。それで成功がしたということを知り、昭和20年6月か7月頃、耳にしたことがあります。それと破風張りですから、弾がスポンスポンと抜けて大きな打撃にはならなかったということも聞きました。

——そうすると、赤トンボでも戦果を挙げられるのでは、という考えも出たのではないですか？

粕井：うーん。それ以前に中練では沖繩まで行けないと思っていました。航続距離がないですもん。宮崎沖の日南海岸とか土佐沖海岸へ行くというのだったら行けます。その程度でしょう。大きな船はとも無理で、輸送船や上陸用舟艇ぐらいしかダメだったと思います。

——国分から人吉、そして観音寺と、何カ所か転々としていますけど訓練の都合で移ったのですか？

粕井：国分は昭和20年1月前後から空襲が激しくなりました。人吉でも敵襲を受けました。それで、九州ではダメだ、四国に行こうということで四国の観音寺で訓練するということになったんです。

——基地によって何か特徴のようなものはありましたか？

粕井：さあ、私はあまり大きな基地を知らないんです。私が行ったのはこじ

んまりとした所ばかりですから。そういう所の方がアットホームで気分が楽です。大きな基地は偉い人たちが……我々の先輩や兵学校出身がたくさんいますし。それから、練習機など彼らから見たら幼稚園か小学生ぐらいにしか見えないでしょう。だから、そういう所に行くことややはり遠慮がちになります。

◆特攻出撃二十分前！

——観音寺基地から国分基地に移ったのは、いつ頃でしたか？

粕井…昭和20年7月です。

——国分基地では、もう訓練は行わなかったのですか？

粕井…もう訓練は出来ません。制空権はアメリカ側にありますから。毎日が出撃待機でした。飛行機は木の葉などで隠して、出撃する時には道路を利用して飛行場まで持つて行って、そこで爆装して飛んでいくというわけです

——特攻命令をひたすら待つというのは、やはりつらいものでしたか？

粕井…なんかこう、ものすごく不安定です。どうしていたのかな……。やはり、不安な気持ちで晩は一杯飲み、そしてダジャレを言い合って過ごしたんでしょう。

——昭和20年8月10日に、いよいよ出撃命令が下されるわけですが、その

日のことを教えてください。

粕井…その日、索敵機から「敵艦艇が日向灘沖約100マイルに接近しつつあり」という連絡が入り、攻撃3時間待機という命令が出たんです。搭乗割が貼られて、一番先頭に私の名前がありました。あと、2人乗りが3機、1人乗りが8人ぐらい。偵察員を入れずに1人で飛んでいく者もいたから、全部で16〜17人だったと思います。索敵機からは、その後、ぜんぜん情報が入らなかつたんですが、そのうちに30分待機になって、いよいよ、「これはもうしまいやな」と思いました。

ところが、昼過ぎから天候が悪くなって雲行きもおかしい……。雲があつてもどうというのではないと思ふかもしれないが、山に雲がかかると、雲の上へ行っても雲が厚い場合、どこまでいっても雲です。雲の下をくぐって行くと山が高かつたらぶつかります。だから、雲がある状態で飛行するというのは難しいんです。そこへ、驟雨というんですか、そういうのが、サアッと降つたりするんです。これはもう、練度の低い連中では無理だと司令部が思ったのか、出撃中止ということになりました。実際、練度も低く、観音寺から国分へ異動するときに2人死んでいます。私の2番機が豊後水道に

はまつて沈没しましたし。機体もエンジンも信頼できるものじゃなかつたんです。結局、その日は解散、攻撃中止、待機ということになつたんです。

——攻撃中止が決まつた時は、ほつとしましたか？

粕井…ほつとしたというより、死ぬ時のびただけという気持ちでした。攻撃中止になつた時は、「ああそうか。なんか今日はストップや」、「次いつやねん」という感じです。

——3時間待機命令が出た後は何をしていたのですか？

粕井…まず、爆弾の装着をします。それから燃料を積んで、いつでも出撃出来るように暖機運転をしながら待つているわけです。

——遺書とかを書きましたか？

粕井…いや、遺書は書いてないです。というのも、他の部隊の場合、特攻に行くというのは最初からわかっているわけです。例えば、詫間で一緒にいた連中なんか、詫間で爆弾を積んで指宿まで行っています。零式水上偵察機に積む800kg爆弾が指宿にないんです。だから、詫間で積んで指宿まで飛んでいる。九四式水偵の場合、500kg爆弾は指宿にあつたから何も搭載しないで飛んで、指宿で500kg爆弾を積んで出撃する。だから、詫間を出る

ときには、もう突っ込むということがわかつているんです。

ところが、私たちの場合、とてもじゃないが沖縄まで飛べない。しかも練度は低い。だから、いよいよ、敵が日本本土に接近してきた時に、何でも使つて少しでも敵の上陸を阻止しなければいかんという切羽詰つた状態で出撃するわけです。戦術的には最後の手段だったわけです。

戦後、戦友会に200人の中、50人か60人ほど来ましたが、特攻隊から外れた連中もたくさんいる。むしろ、その方が多いんです。それから特攻でも、その日のメンバーはたつた12人です。その12人のうち、士官や下士官を除いた練習生は7、8人ですから、誰がメンバーだったかはつきりわからないし、その話になると皆、あまり話たがらない。ですから、その時の真相は未だにぼんやりしています。私の飛行機に燃料をどれだけ積むかと整備員が言った時、「半分でもいい」と答えた隊員がいた。それを知つたのは戦後のことなんですけど、それを聞いていたのは、私の仲人をしてくれた男ですが、これも死んでしまいました。なんかこう、未だに雲に包まれたような状態のままです。

——30分前待機になつた時、出撃す

る場所は決まっていたのですか？

粕井…いや、敵の艦船の位置がはっきりわからないんです。だから、位置はどこそこから南南東何マイルのところ、艦船はどういう構成で、どの方向に進んでいるかという具体的なことがわからない。輸送船なのか、軍艦なのか、軍艦でもどういう種類なのかという、それも、全然わからないわけです。

だから、その偵察もどの程度、本当だったか。日向灘で偵察機がよく落とされた。九州には佐伯とか博多とか水上基地がたくさんありましたが、三座水偵の偵察機がよく落とされました。機銃が旋回銃1挺しかないですから。私の教官だった松阪中尉も哨戒で戦死しています。その前に電信を打つわけですが、それも打っている途中で撃墜されると敵機が空母からのものなのか、あるいは基地からの飛行機なのかというものはっきりわからないままです。情報も非常に不正確になるんです。

—— 出撃命令が出た8月10日と言えば、すでに広島と長崎に原爆が落とさず、すでに広島ははつきり聞きました。長崎に落ちたぞということも聞きました。ピカッと光つたら物陰に隠れるというわけです。軍服も全部カーキ色に染めました。ところが、カーキ色の服

は新型爆弾に弱いというわけです。白い服だったら反射して被害が少ないから白を着るというのですが、白い服なんてありませんもの。そういうことで、情報というのは断片的に聞こえてくるわけですが、それが噂だったり、誇大だったり、あるいは過小に握りつぶされたりでした。

—— 赤トンボの特攻は最後の手段というお話がありました。その頃は、その最後の手段を使わなければならぬ状況だったようですね。

粕井…そうです。東京も大阪も焼け野原。大阪の私の家も残っているかどうかわかりません。何万人も被災して殺されている。言ったら戦地も銃後もなわけです。どっちが安全かと言っても、自宅にいても、全然、安全じゃないわけです。じゃあ、同じ死ぬなら戦果を立てて潔く死のうじゃないかと。一対一で戦っても1人殺せるかどうかだけ、飛行機に乗ってうまくぶち当たれば何百人と刺し違えることができます。わが家は兄や弟もおる。兄は長男で家を継がなきゃいかん。弟はまだ小

さい。なら、次男の俺が死ぬのは当たり前じゃないかと。戦友もずいぶんと倒れていった。じゃあ、俺も、恥ずかしくないような死に方をしようということです。

—— 大阪のご家族の安否を確かめることは出来なかったのですか？

粕井…はい、確かめる術はありませんでした。終戦で帰ったら家があつて、私の所のちょうど一角が焼け残っていました。

—— 同期である13期飛行予備学生の戦死者は多かったですか？

粕井…相当、戦死しました。13期予備学生の戦死者は1616名……。航空隊のことですから、あちこちに飛んだりするでしょう。そうすると、「やあ、貴様、生きてたか」、「おう、まだ生きてるぞ」、「そういえばな、俺とこの分隊のあいつも死んだ、あいつも、あいつも死んだ」、「お前、あいつ知ってるか」、「知ってる、知ってる。あいつ、よう飲んでん」、「あいつも死んじゃった」とか。ポツリポツリと欠けていくわけです。

—— 特攻で亡くなった同期生も多かったそうですね。

粕井…相当おります。1616名の戦死者のうち特攻で戦死したのが448名で、その数は海軍士官特攻の56%に及びます。

私が一番親しかった確本守（うすもと まもる）は、私が詫間から人吉に転勤する時、詫間に残ることになりました。彼の実家は滋賀県でしたから、

「たまに帰れるかもしれないわ。ええことしたな」というようなことを言いました。彼とは、日曜日によく一緒に高松まで飲みに行きました。汽車一本遅れたら走って帰らないと間に合わない。それで、飲んでから4キロ走ったりしましたが……昭和20年4月に、

九四式水偵で特攻出撃しました。また、硫黄島で死んだ早瀬豊は拓殖大学柔道部の主将で、たまたま硫黄島に飛行機で行って、帰りの便がなくなつてそこで死んだそうですが、真相はいまだにわかりません。

—— 「軍隊は運隊」と言いますが、今のお話しをうかがうと改めてそう思いますね。

粕井…そうです。本当に運です。だから、戦闘機に行つたから危ないとか一概に言えません。昭和19年に飛行要務士というのができました。搭乗員として採用されても、やはり、向いていないという連中が出たんです。ですが、

せつかく採つた連中をそのまま辞めさせるのはもったいないということで飛行要務士ができました。

飛行要務士というのは、どういう仕事かというのと、搭乗員というのは出撃したらすぐ死んでしまうから、継続した記録を残したり、準備や後始末がでないわけです。例えば、人事一つで

も、その搭乗員が部下の人事を担当している、それが飛んで行って亡くなってしまったら、彼のやった仕事が無意味にならなくなってしまう。そういうわけで、戦闘記録や人事記録などといった仕事をするのが飛行要務士です。今のクラブ活動でいうマネージャーみたいなものです。一見すると飛行機に乗らないから、生命は助かるだろうと思っていれば、案外これが航空母艦に乗ったりして死んでしまっているんです。

◆特攻隊の解散

——8月10日の出撃中止命令から終戦までのことをお聞かせ下さい。

粕井…終戦の日は何か発表があるというところで、士官は士官官舎で分散してラジオを聞いていました。聞きにくかったです、どうやら負けたりしなかったというわけ……。何か、うつろになりましたね。張り切っていたのか、死を覚悟して毎日待機していたのに、目標というか、生きがいというか、そういうのがパツとなくなつたような……。それから、いろいろな噂が出てくる。朝鮮半島の元山航空隊では、「搭乗員全部集まれ」というので集まったら、飛行場へ整列させて機銃で全員撃たれてしまったとか。あるいは、ソ連が皆

を拉致したとか……。それから厚木航空隊ではピラを刷って、「われわれは絶対徹底抗戦する」というようなことをやったとか。それから、どこかの司令長官は沖縄へ彗星艦爆で突っ込んだとか。いろんな情報が入ってくるわけですが、どれを信用していいのやら。それからアメリカがやってきて特攻狩りをやるとかやらんとか……。

そのうちに、確か昭和20年8月18日だったと思います。「乾龍」特攻隊は解散になって、「各自命あるまで自宅待機せよ」ということになりました。とにかく、搭乗員は先に帰れというので、私は特攻機となっていた九三中練機で大分基地まで飛ぶことにしました。後席に出撃時のペアだった野地二飛曹を乗せ、他に2機も同行して3機編隊で司令部があった大分まで飛んだんです。そこで燃料補給と一晩泊まるぐらいしてくれると思っていたら、大分の方が先に解散していて誰もいないんです。大分では小学校に分散して宿舎にしていたから、そこへ行ったら、「兵隊さんが残してくれた米が少しあります。おむすびでもつくりますよ」と言ってくれて、一緒に来た連中に持って帰りました。翌日、同行した2機と別れて、私は岩国に飛んで陸軍航空隊に燃料補給を頼んで、その後、広

島の方に行こうと思ったんです。ところが、広島はひどいことになっているらしいし、飛行機の整備も頼りないから、呉市の南を通って大阪へ帰ることにしました。

ところが、呉あたりまで飛んだら、エンジンがプスプスいって回転が落ちてきました。野地二飛曹に「手動ポンプを押せ」と言いましたが駄目で、ちょうど、空き地が見えたので、その空き地に「不時着するぞ」と言って、着陸しました。そこは、陸軍か海軍の飛行場だったようで、ドライバーが見つかりましたのでエンジンカバーをこじ開けたんです。そしたら、燃料濾器（ねんりょうこしき）がベシヤンコに歪んでエンジンに燃料が注入しないわけです。それで、「もう、濾器なんか放っておけ」と、そのまま離陸して、西明

石あたりの飛行場らしい空地に着陸しました。そこで飛行機を捨てて、落下傘など身回品りを大八車に積んで駅まで行って、上りの列車に乗って大阪駅に帰りました。野地二飛曹とは大阪駅で別れて、私は梅田から市電に乗って実家のある上本町まで来たら、周りは焼け野原なのに上本町だけ残ってますやん！それで、「ああ」と思って家の方に歩いたら、家のある一角が焼け残っておりまして。もう夕暮れ近くに

なっていました。家に着いたら祖母が出て……私、改名する前の名前は「完（たもつ）」と言っています。今は戸籍名も貫次に変えていますけど……「おう、たもつか、たもつか」と。

——飛行機で実家の近くまで帰ってきたというのは珍しいのではないですか？

粕井…いや、いろいろいます。例えば和歌山の連中なんか、紀ノ川の川原に不時着して、そこから家帰ったとか。大分では司令部が解散していましたけれど、南九州などの各基地から降りてくる飛行機が後を絶ちませんでした。そして、「あんた、どこまで帰んのん」、「ここから家帰る」、「飛行機いりませんな」、「いらぬい」、「じゃ、私にください」と言って操縦したこともない飛行機を、「これ離陸何ノットですか」、「着陸何ノットですか」、「巡航は何ノットですか」、「ガソリンはどれぐらいありますか」と聞いて飛んで帰った者もいました。当時、国鉄も復員と言った、もうノープラスで乗せてくれたり、あるいは、イモ判を押して、「帰郷につき、便宜よろしく頼む」と書いたガリ版刷りの証明書みたいなものを持って行ったら、全国どこでも通用したというような時代です。日本国中、混乱していましたから。

——ある予科練出身の方のお話では、終戦で生きて帰ってきたことが恥ずかしく、親戚の家にいて、実家や知人の目をしばらく避けていたということですが。

粕井…そういう人はいたでしょう。予科練生は若いだけに非常にまじめでしたから……。中には、昔の中学校や母校へ復帰した予科練生がいて、「気合入れたる」と言ってお下級生をぶん殴ったりしたような者もいましたから、人それぞれでしょうが。

◆ベストを尽くした海軍時代

——その後、戦後の人生で、海軍軍人だったことや、特攻隊員として経験が役に立ったという経験はありますか？
粕井…あの時、体験した「死」というか、「どん底」というか……。どんな目にあつても、その頃のことを思えば怖いことは何もないということ。それと、短期間でしたけれども、全身全霊、自分の力を出し切った、という自信です。やればできると……。――

——戦争を知らない我々が、特攻や戦争のことをどう受け止め、そして、体験者のお気持ちを、どう後世に語り継ぐべきか、粕井さんのお考えを知りたいのですが。

粕井…聞く人の先入観というか、土台

というか……。戦後、非常に曲げられた歴史観、日本の過去に自虐的な史観を持つことは、私は残念だと思います。

自虐史観の人に、いくら話してもその土台が違うわけです。だから歴史というの、それを書いた人の立場、時代によって、どうにでも曲げられて伝えられる場合があります。それを正しい意味における客観的な事実として捉えたらうという必要があるような気がします。

例えば、東京裁判が正しいかということ……東京裁判というのは事後法です。裁判のために法律が作られて罪が生まれたのだから後からでっち上げたものでしょう。それに基づいて今、国旗も揚げない。近所では私の家だけ国旗を揚げています。ですが、憲法記念日には揚げない。アメリカが占領の最中に押し付けて、押し付けられた憲法をいまだに変更、改正しようとしてもしないような日に、なんで日の丸を揚げる必要があるのか。だけど、祝日は日本国民として誇りを持って、自信を持って、日本の国を立派にしていかなければならないと思って国旗を揚げています。もつと素直にというか、自信を持ってというか、民族の誇りというものを保持するために、特攻というものは、こういうものだった……。皆の純粋な気持ち

の表れであつたということを私は伝えたいと思います。

——我々は先入観を持たずに、実際に体験された方の気持ちを知りたいと思うのですが、粕井さんは特攻をどのようにお考えでしょうか？

粕井…今の時代は個が大切、何でも己が大切。家・社会・国家というものはウエイトがものすごく低いです。ですが、私たちの育ってきた時代というのは国家、地域、家……特に家というのは非常に大切でした。そういうものを土台に、純粋な気持ちで特攻というものが行われた。だから、その純粋な行動に対しては敬虔な気持ちで、その犠牲に対して我々は敬わなければならぬし、そういう方々に対する敬虔な気持ちを忘れてはいけないと思います。

しかし、戦争はどうかというと、戦争は絶対に悲劇です。これはやるべきでない。だけど、戦争にならないために、どういうふうにしたらいいかというところでしよう。戦争は非常に悲惨である、だけど、今の民主主義はなんかない、知らん、人気投票みたいなことになつて、国とか、民族とか、社会がよりよくなるためにはどうしたらいいかという自覚もなしに、自分のことしか考えない、自分の議席を守ることが第一だというふうな人をたくさん選んで、国

が右左揺れ動いているということは残念な世の中だと思います。

——粕井さんの最終階級は海軍中尉ですが、士官として、特攻隊員として、あの特攻作戦について何かご意見はありますか？

粕井…特攻作戦はやはり邪道でしょう。あの大西瀧治郎中将がおっしゃったように、のつびきならない最後の手段を取ったと言いながら、必ず死ぬというような戦法は、私は、やはり大西瀧治郎さんがおっしゃったように邪道だと思います。

——特攻作戦について疑問をお持ちになったことはありますか？

粕井…ありません。私は粕井家の次男として当然の責任を果たすべきだと……。もうこれ以外に日本国民として道はないという気持ち。恥ずかしくないような最期を遂げたいと、そういう思いだけでした。

——特攻で戦死された同期の方たちのことを思うと、どのようなお気持ちになりますか？

粕井…「貴様とおれとは同期の桜」……特攻の慰霊祭に後、皆で肩を組んで歌う。その時に皆、いまだに涙がこぼれます。一頃、それが流行歌のように何か宴会の余興の1つで、何も知らない連中がやると、我々の同期はそこ



へ行つて、「やめろ」と言つて、「こんな酒席で歌うような歌とちがうんだ」「今すぐやめい」と怒鳴り込んでいきました。靖國神社へ参拝しても、どういふんですか、ものすごく悲痛な気持ちになります。「なんで、あいつと俺とこない違うんや」と……。本当に何も知らんで……。世の中の楽しいこと、お酒飲むことすら知らん、それで死んでいるでしょう。当時の平均年齢は男性で40歳代です。ところが、私はその倍、生かされてもらっているんです。だから、本当に申し訳ないという気持ちと、ありがたいという気持ちとが交錯します。

——今の若者たち、そして、子孫にこれだけは語り継ぎたい、これだけはわかつてほしいというものがあれば、教えていただきたいのですが。

粕井…どの時代でも、これが正しかったとか、こうしなければならなかった

というのがあると思います。明治維新前後では勤皇か佐幕か、あるいは攘夷か開国かという時に犠牲になった方々もいますね。だけど、その立場、立場において、やはりその人は、この生き方がベストやと思つて戦い、あるいは、それゆえに暗殺され、暗殺した人もいるが、皆、それは尊い命であり、その時代、時代にベストを尽くそうと思つた人たちがほとんどだったと思えます。そういう人たちの考え方、人生のあり方というものを尊重して、自分がせっかく与えられた生命、一生というものを大切に、その方が、この世の中に生まれたことで世間にプラスになるような生き方というか、そういう自覚を持つてほしいと思います。

——我々は特攻隊戦没者慰霊顕彰会の1人として慰霊行事などの活動をしています。我々に対する要望は何かありませんか？

粕井…いや、ご立派だと思います。そういった方々がいなくなつたら、亡くなった戦友が死んだ意義が少しでも高められることは有難いことです。だから、そういうお考えをずっと続けられるようにしていただきたいと思つています。

——今日は貴重なお話をありがとうございました。(……了……)

粕井 貫次（神風特別攻撃隊 乾龍隊）軍歴

- | | |
|-------------------|-------------------------------|
| 1923年（大正12年）12月 | 大阪府大阪市に生まれる。 |
| 1943年（昭和18年）9月 | 第13期海軍飛行専修予備学生として三重海軍航空隊に入隊。 |
| 1944年（昭和19年）1月 | 水上機操縦訓練のため博多航空隊に転属。 |
| 1944年（昭和19年）4月 | 詫問航空隊に転属。 |
| 1944年（昭和19年）5月 | 海軍少尉に任官。 |
| 1944年（昭和19年）7月 | 分隊士兼教官として出水航空隊・国分分遣隊に赴任。 |
| 1945年（昭和20年）1月 | 神風特別攻撃隊・乾龍隊編成。人吉航空隊へ移動。 |
| 1945年（昭和20年）4月 | 観音寺航空隊に移動。 |
| 1945年（昭和20年）6月 | 海軍中尉に任官。 |
| 1945年（昭和20年）7月 | 国分航空隊（第1国分基地）に移動。特攻待機となる。 |
| 1945年（昭和20年）8月10日 | 乾龍隊に特攻出撃命令が下る。出撃三十分前を体験。 |
| 1945年（昭和20年）8月18日 | 乾龍隊解散。大分基地まで飛行。 |
| 1945年（昭和20年）8月19日 | 岩国、呉、西明石付近まで飛行の後、列車で大阪の実家に帰宅。 |

かつてかかる海軍士官ありき

沖繩の海に逝きし

「寺岡達二海軍中佐を偲びて」

古川 忠純

「編注・執筆者の古川忠純氏は、故寺岡達二海軍中佐（海兵71期、海軍大尉、彗星特攻第3御盾隊六〇一部隊を率いて、昭和20年4月3日、沖繩北端付近の敵艦船に突入散華された。戦死後海軍中佐）に関する記録を『沼隈の鷹』及び『沼隈の鷹・補遺』として刊行されたが、その著書の中で、古川氏は、寺岡中佐の幼少期から青年にわたる御本人の書かれた文章、及び周辺関係者の証言をまとめて掲載しておられるので、その生い立ち等の一端を知ることができる。特攻戦没者の方々お一人お一人が幼少期をどのように過ごされたのか、その人間像を具体的に知る機会には少ない。この著書は、それを知ることのできる格好の著述と思われるので、特に戦争を体験されていない世代を始め多くの方々に、当時の若者の生き様をお伝えいたしたく、本稿はその概要を取りまとめ御寄稿いただいたものである。」

◇ ◇ ◇

はじめに

私はかつて『沼隈の鷹』と題する小誌を上梓した。主人公は昭和20年4月3日、沖繩戦にて特攻散華された寺岡達二海軍中佐（注1）である。偶然の出会いがそれを決めた。推敲に当たっては、親しく話を聞かせていただいた中佐の実兄良一氏からの情報及び一部お借りした資料などを参考とさせていただいた。しかしながらただそれだけでは中佐の実像を書き尽くせるものではなかった。否、「上梓した」と表現すること自体、中佐に対して礼を失した表現であると気が付いた。なんとすれば人間寺岡達二を語る上で必要な情操



ぬまくま たか 「沼隈の鷹」の表紙絵

面形成に至った少年時代の生育環境、生活実態等については、わずかな面談時間で得られた良一氏からの伝聞がすべてであり、具体的な事実はほとんど不明のまま執筆を終えてしまっていたからである。小林純男氏（注2）はじめ少なからぬ同僚・部下達からもなお敬慕されている背景には、海軍軍人としてのみならず人間寺岡達二としての魅力が備わっていたはずである。それを明らかにしたい。ただそれには「少年時代から青年期に至る成長プロセスを知らずして解せるものではない」との思いを残しながら。



海軍大尉時代の寺岡中佐 (昭19.12.1以降)

幸いにしてその後、中佐の甥たる寺岡達裕氏のご好意により中佐少年時代の作文・絵画などをお借りすることができた。そしてそれから垣間見た幼き日の中佐からは、後年愚直なまでに自らの信念を貫き、愛する祖国のため残された同胞の幸せを願いつつ爆装の

航空機を駆って敵艦に突入、弱冠23歳の若さで散華された闘将の面影はない。否、豊かな感受性を備えたほのかに土の香漂う逞しくも愛すべき少年の息吹が感じられ、改めて素顔の人間寺岡達二に触れた思いがした。遅まきながら本寄稿を思い立ったゆえんである。「人間寺岡達二」、本稿によりその実像に少しでも迫ることができれば筆者望外の喜びとするところである。

（注1）海軍兵学校第71期、昭和20年4月3日第3御盾隊指揮官として沖繩海域にて特攻戦死。二階級特進、任海軍中佐。

（注2）第13期甲種飛行予科練習生出身、海軍二等飛行兵曹。土浦海軍航空隊にて教育を受けた者から選抜され、第41期飛行練習生として霞ヶ浦海軍航空隊にて寺岡達二海軍中尉（当時）の薫陶を受ける。この間の影響少なからず、戦後中央大学に学び、卒業後中学校教諭を経て航空自衛隊へと進む。元一等空佐。

海軍兵学校における中佐

優等にて小学校を終えた中佐は兄に続き藩校の流れを汲む名門福山誠之館中学校進学を決めた。当時開闢以来とされた兄により啓開された同校通学への道。それは広大な沼隈半島を横切る



海軍兵学校一号生徒時代 (昭17.5.31)



飛行服の中佐 (海軍少尉時代) 後方は艦爆「彗星」



飛行服の中佐

実に片道5里(20km弱)の山道を晴雨にかかわらず毎日通うことが条件となる。勿論自転車という手段を介してではあるにせよ、慣れるまでは勉強どころではない辛さがあったはずである。しかしながら中佐はそれに耐えた。否、そればかりかその事実を承知している級友などからどこで勉強しているのかと上がる声を尻目に学業成績は常に上

位であり、時に一番になったこともあるという。その中佐が上級学校進学については家庭事情もあり、官費給費制度のある学校、とりわけ海軍兵学校を早くから目標と定めていた。

当時はいわゆる無条約時代突入直後に当たり、非常時の掛け声のもと軍備の拡充と儉約の勵行が声高に唱えられ、マスコミなどはこぞって軍部を礼賛、英雄豪傑ものももてはやされ、子供達の間では戦争ごっこやチャンバラなどがはやっていた時代である。兵役は壮丁たる男子国民の義務、どうせ軍隊に行くのなら指揮官でと思うのは人情である。そして、陸軍士官学校及び海軍兵学校は共に官費であり、親に経済負担を掛けることなく、卒業すれば将校として身分は保証されるという魅力があった。一方、一朝有事の際には真つ先に指揮官として戦場に赴き、敵と戦う覚悟がなければならぬ。しかしながら、損得勘定ではなく、名誉が尊ばれていた時代である。いきおい良好に對する志願者は増加の一途を辿った。したがって競争は熾烈であり、一高・三高などの高等学校と並び難関校の一つと目されていた。特に後者はそのスマートな軍装と相まって人気は高く、名門中学校などこぞって合格者数を競い合っていたものである。幸い中

佐は努力の甲斐あり、卒業を待たずして(注1)両校共に合格、結果として第一志望の海軍兵学校への進学を決めた。

昭和14年12月1日、時の校長海軍中将新見政一より久邇宮徳彦王殿下以下601名に對し、海軍兵学校生徒を命じられ、中佐も直ちに12班36分隊よりなる生徒隊に編入された。そしてこの時から海軍兵学校第71期生として、厳しくも充実した海軍生活が始まることになるのである。

ということ、これより中佐の輝かしい海軍生活の嚆矢となる兵学校生活を数々のエピソードを織り交ぜつつ書き下ろして行きたいところであるが、残念ながら筆者にはそのような情報及び知識の持ち合わせがない。しかしながら幸い、第70期生卒業に際し、所属分隊の第17分隊員より贈られた中佐評が残されている。苦業を共にした先輩、後輩、そして同期生からの熱性溢れる励まし、そして感謝の言葉である。雄弁に中佐像が物語られていると思われ、そのことから、それらにつき僭越ながら筆者評を加えつつ、披露させて頂くことにしたい。

(注1)中佐はいわゆる四修で兵学校合格の榮譽を勝ち得たのであるが、中学一年時、腸チフス罹病により1

年留年していることから年齢的には卒業生と同年齢となる。

○(第36分隊) 一号生徒より寺岡二号生徒

第70期生卒業に際し、卒業生たる第36分隊一号生徒より寄せられた寺岡中佐(二号生徒)評である。紙面の都合上ビッグアップの上、筆者の所感を加えて記載させていただく。

・豪放闊達 謝御鞭撻 祈御健康 併期再会 坂東宗雄

・寺岡君二贈ル 男子恥独善 人生感意気 何恐哉小人之言 一意斷行已信念

・同郷之愚先 呂人生(岡佐古昌人) 七転八起 其頑張以宜範 片山伍一

・其ノ鼻息 君向フ所 敵無カルヘシ 愚庵光本(光本卓雄)

・其気力 其体力 其頑張 以テ範トナス

・益々御健闘ヲ祈リ 併セテ再会ヲ期ス

・若者乃血潮ハ 時ヲ得テ燃ヤセ 熟夕 意気夕 頑張りダ

・短艇係 土田印(土田良知)

・功ニアラス名ニアラス 不滅ナルハ 唯誠 誠ニ発シ誠ニ死ス 偉大ナル

・哉兄ノ黙々タル努力 道ハ唯正

三由愚人 (三由敏夫)

枕おぼゆすれど 消えぬ高軒

癩に障れど 如何ともなし

辛くとも優勝んが為に頑張りぬ

共に磨けり 銃剣の道

貴殿に対し別離の情切なるものあるのみにして特に言う程の事もなした

だ貴殿が将来の為敢えて一言を呈するならば「自分自身にては何等悪気

なく気付かざることも先輩上級者より見れば甚だ不埒と感ぜらるる事あり

純真性を通り越しうずうしく見らる甚だ損なり 注意せられよ」

贈寺岡生徒 江戸産市川妙水印

(筆者評)

自ら正しいと信じるころに向かい邁進する姿勢については上級生等しく口を揃えて評価するところ、ただ中にはやり過ぎたと注意する生徒も。

兵学校の一号生徒は文字通り生徒館の盟主である。絶対的な権力をもって二号以下の生徒に君臨していた。この

ような中において実態は不明であるが、下級生指導につき自らの正義感から上級生を差し置いてでも諄々とその非を説く中佐像が浮かび上がってくる。通常このような時、上級生徒が立ち会っておれば自らは一歩下がり、指導は彼らに任せるのが一般的である。しかしながら、それでは中佐の正義感

が許さなかったであろう。苦虫をかみつぶしたような表情の一号生徒をよそに、「その三号、待て!」と呼び止め、一席ぶつ中佐の姿が髣髴とされほほえましい。

が許さなかったであろう。苦虫をかみつぶしたような表情の一号生徒をよそに、「その三号、待て!」と呼び止め、一席ぶつ中佐の姿が髣髴とされほほえましい。

○(第36分隊) 三号生徒より寺岡

二号生徒

第70期卒業に際し、下級生たる第36分隊三号生徒より寄せられた中佐評である。紙面の都合上ビックアップの上、筆者の所感を加えて記載させていただくことにする。

実践躬行の人 私の見たる感じです一年間同じ分隊に居て兄の崇高なる人格に幾度か奮奮努力しました別るるに当り原村の夜戦に於てしのびよる寒さの中に友に哨兵に立ちし時の事を思ひ出します 兄の御健康を祈り併せて御健闘を期待す 将来とも宜しく御指導を乞ふ

山内哲夫

・奉呈寺岡兄

至誠 不撓 熱血

兄に相見えしより 既に一星霜 時に艱難を共にし 時に笑を分つ 今にして思はば 兄の一言一動吾によく範なりしを知る 願わくは兄 分隊は変わるとも 吾に御指導下され度し 北植武男花押

北植武男花押

・ 一個年間寝食ヲ共ニシ而モ無言ニシテ 実践躬行 範ヲ示サレタルハ誠ニ尊カリキ 私ノ如キ默然タル者ハ感謝ノ言ヲ見ズ 又之ニ報ヒル事ダニ出来ザルハ遺憾ナリ 但シ編成替トナリ別レリトトモ貴兄ノ言ハ胸ニ抱キ努力邁進スル決意ナリ 人生ハ連綿タル戦ナリ 祈奮闘

・ 実践 躬行 鯉城士 ハルつぐ 遠藤印

貴兄の実践躬行には常に敬服しておりました 今後も範として生徒館生活に邁進し度 分隊編成変後も一更御指導願ひます 間中十二拝

・ 礼儀正シキコト 訓練ニ熱心ナルコト 私ハ特ニコノ二ツヲ貴兄ヨリ教

エラレマシタ 分隊編成替トハ云ヘ

同ジ生徒館ニ生活スル事デスカラ愈

叱咤勉勵ノ程深クオ願申シ上ゲマス

御健康ニ留意サレ立派ナ一号生徒ト

ナラレンコトヲ希望シテヤミマセン

・ 健全力 有氣迫 兄ノ姓名申告ハ將

来ノ思ヒ出デス 諸橋久信拜

・ 貴兄ハ訓練ニ熱心ナル事 生徒館一

デアリ升 アノ烈々タル闘志ヲ私ハ

兄ヨリ学ビマシタ 今後モアノ熱意

アル御指導ヲ給ハラン事ヲ希望致シ

升 御機嫌ヨウ 辻 満寿夫印

(筆者評)

自らが決めたことは何があってもやり通す。すなわち実践躬行の人であったことは少なからぬ後輩生徒が等しく評するところ。そしてそれは後に一号生徒となつてからも一貫して行われていたことは次項にて収録の後輩評からも伺い知ることが出来る。中佐を特攻という究極の攻撃に駆り立てたのも危機に瀕した沖繩同胞を救うべく蝟集する敵艦に対し一矢なりとも報いたいとする思いの具体化にはかならない。実践躬行、それは中佐の海軍生活を通じて持ち続けられた指標であり、また最後まで守り通された姿勢でもあったのである。

兵学校名物「姓名申告」時の中佐の氣迫に新三号たちはいきなり度胆を抜かれたようである。上級生たる一号生徒、面目丸つぶれであるが、闘志の権化寺岡生徒の姿が髣髴とされる。

○(第17分隊) 同期生より寺岡生徒

第71期卒業に際し、第17分隊クラスより寄せられた中佐評である。紙面の都合上、ビックアップの上、筆者所感を記載させていただくことにする。

・ 別るるに当り一筆す ム日本国立ヤップ出身、まさか・・・ ムこりやなんじゃ、も聞けなく思うとホロリとする。

随分悪口も言ったが許せ 学校も隣なれば 仲良くすれば良かったね 余は汝の真面目なる一面を伸ばさん ことを祈る

・愛すべし熱血多感の人 君正義を愛して邪悪に與せず 遊惰を排し進んで難事に投ず さらば好漢洋上の乾杯を期せん 柴 正文

・色は黒いが熱血漢 下級生指導の熱意は以て範たり 同じことを数回注意し 又同じことを数回言うは不可と覚えたり されど将来の部下は兵なれば 将来は良からん 貴様とは深き交わりもせず 兎角意見が違い 意気投合せざりしは小生の狭心の致すところならんか まことに残念なり 亦実習で一緒とか ともに大いに張り合おう 兵の士気をあげるのは俺達だ 今までの熱意をもって頑張られんことを刮目して待つ 小さいほうだから今度再会したときはあまり小さいとばかりにするなよ

・「もう一度言う・・・」何度聞いても味のある才達示！ 負けぬ気は良いが自己の非を悟らば速やかに之を改められたし玉に疵 一考ありたし

・一年間ベッドメイトとして暮らしたが大分喧嘩もしたな 貴様は元気が

黒田浪士 与田俊郎

西山亮次

貴様は元気が

あつて大いによろしい 然し少し物事を自己に有利なる如く言う癖あり この点改めればますますよからん 太平洋山なす波を乗り越えて進まん 活躍を祈る 薩摩の人 赤塚一男

・左隣にいて大分悪いことを申したが いよいよ別れることになった 良く口論しただけにメモも深い 本心の最も真面目なる人 これが今頃になつて感じてゐる事 兵学校の最後の学年に兄の如き幾多学ぶべき事ある人と一緒になつた事を悦んでいる 一面俺と正反対のところがあるだけに 意見がそれだけ合った事もあつたが大変よく衝突致した 卒業して思い出すとはほほえみを禁じえない男 かの下級生指導の熱意 物事を直視する態度は以つて範とせしところ 最後に悪口一つ その気隆きあり低きあり集ずるあり散ずるあり 即ち不可 離別に際し武運を祈る

・気はやさしくて力持ち？ 四号のときは同じ第一班で 知つていたので安心して17分隊へやつて来た次第 名剣術係 名銃剣術係 名お達し係 君一たび 江田島を出でて 行途は何処 君がなす事 熱心ならざるはなし 彼の熱と意気を以て 将来の奮闘を祈る 松本 宏

小西哲夫

松本 宏

松本 宏

松本 宏

松本 宏

○(第17分隊) 二・三号生徒より 寺岡一学生徒

第71期生卒業に際し、下級生たる第17分隊二号及び三号生徒より寄せられた中佐評である。紙面の都合上、ビッグアップの上、筆者所感を加えて記載させていたたくことにする。

・鈍刀よく骨をきるか 熱意溢るる 御指導を深謝す 願わくは忘れざらんことを 此の東国の凡夫 芳郎を 風見芳郎

・大丈夫 熱意ある御指導を謝す 祈御奮闘 愚鈍なる補佐 門松 我国古武士を眼前に見るが如き 貴兄の一直線なる心体格 頼もしき我等の一号生徒 心より溢るる熱意ある御指導を謝す 祈武運長久 佐古田英郎

・直径剛情ノ雷親父 ソノ比類無キ驚進力ヲ唯一筋ニ捧ゲラレヨ 熱意 満々タル御指導ヲ多謝ス 越後ノ雪達磨

・十七分隊のウルサ型 真摯敢闘の花 形 馬車馬の如く猛進せられよ 大器晩成居士

・精力絶倫 今の儘にて将来も驚進せられよ 米英も吹っ飛ばん 愚なる対番堀川

・意気天を衝く 入校後幾度かの御注

意 深く感謝す 丈長い お達しあるか 馬面よ この意気で終始一貫 頑張られよ 福家正昭

・十七分隊で最も個性を發揮した話せる男 平生凡人時々聖人か 御武運 長久を祈る 怒つた時は目をむいて つまつたお達示七曲 恐ろしい顔はしていても 気はやさしくて力持ち かたくても かもやわらかい熱血男児ここにあり 西尾博評

・熱と意気 男らしい男 祈御奮闘 勢州の素浪人 章魚 一直線 至誠 意気と熱 謝御指導 祈武運長久 藤岡 実

・ほとばしる熱血鉄石の信念 純忠至誠の精神 古武士の風格を眼前に見る「純真なれ 正直者たれ」言々 今後永久に我等の耳朶に残るべし 熱誠溢れる御指導 感謝あるのみ 岩目順也

・攻撃精神の権化 祈奮闘 永井 命令の即時実行と報告 寺岡週番生 徒の強調する所 江藤

・熱血の快男児 やるべき時はやる の人 永遠に忘れ得ぬ人よ 祈武運 長久 殿元

(注1) 寺岡生徒は第17分隊剣術係兼銃剣術係であった。同補佐には二号生徒が当てられる。

殿元

(注2) 対番とはハンモックナンバー即ち序列が同じ位置にある上級生又は下級生をいう。

(筆者評)

兵学校におけるクラス(同期生)及び分隊における相互の結びつきには格別なものがある。特に後者は起居を共にすることから日常生活におけるしつけ教育をはじめ、あらゆる競技に対する勝たんがための練習を絶対的な権力を有する一号生徒(最上級生)指導の下に行く。絶対服従である。言い訳は見苦しいとして一喝のもとに修正を食らう。ただそこは全国から選ばれ採用された俊才ぞろいの海軍生徒である。鉄拳による修正がもたらす意味を肯定的に受け止め、それぞれが逞しくなつてゆく。上記寄せ書きによりそれらの断片が垣間見え興味深い。

ここに中佐の一号生徒時代の生徒作業簿(注)が残されており、その最終記入日は昭和17年11月8日(卒業日は同月15日)となっている。以下に記載内容をそのまま掲載する。当時の中佐の心境が髣髴とされ、襟を正しめられた思いがする。

(注) 学習訓練の所感・週末所感などを日々記載したもので、後日分隊監事・期指導官などの点検を受けることになっている。

○昭和17年11月8日(日) 自選作業「分隊会」

「学習訓練二関スル所感」

分隊会ニ於テ吾人ヲ心ヨリ祝福シツツ送り出サントスル下級生ノ真情ニ触レ感銘一入深キモノアリ

「週末所感」

卒業ヲ旬日ノ後ニ控ヘ三カ年ノ兵学校生活ヲ顧ミル時感慨一入深キモノアリ 諸先輩教官ノ恩恵モサルコトナガラ脈々トシテ人ヲ打ツ海軍ノ伝統ニヨリ大本ヲ誤ルコトモ無ク今日ニ至リタルヲ最モ欣快トス 時恰モ大東亜戦争下活躍ノ実施部隊ニ出ズル身 無上ノ光榮ニ身モ心モ打チ振ワンバカリナリ コノ将来ノ大任ヲ思ヒ卒業マデノ期間ヲ最有意義ニ過ゴサントス (終)

海軍航空隊教官としての中佐

そもそも筆者に「中佐のことを調べたい、書きたい」と思うきっかけを与えていただいたのは、元部下と称する方から寄せられた一通の手紙である。この発端は、航空自衛隊奈良幹部候補生学校資料室の中佐兵学校時代着用(注1)の軍服(注1)が氏の目に留まり、寄贈者名より筆者を突き止められたことに始まる。第13期甲種飛行予科練習生出身の小林純男、と氏は名乗った。昭和19年9月1日、霞ヶ浦海軍航空隊に

て第41期飛行練習生として選抜された200余命中の一人として約3カ月、当時先任飛行士兼分隊長として指導に当たっておられた寺岡達二海軍中尉(当時)の薫陶を受けたとある。因みに氏は後に航空自衛隊発足するやそれまでの教職をなげうち航空自衛隊へと進み、一等空佐で退官するまでパイロットの道を歩まれた極めて誠実な方である。

の震えが止まらなかつたそうである。そして氏は、その末尾で中佐の墓参を叶えさせていたのだきたいと結んでいた。はからずもそれが契機となり、筆者はまだ見ぬ御遺族に手紙を書くこととなり、それが「沼隈の鷹」起稿へと繋がってゆくのである。

氏によると同期生中には「テラチューはバッキン(堅物)だ」などと陰口をたたく者がいたそうであるがその指導法、人間性には少なからぬ練習生の心を引きつけるものがあつたという。氏は中佐の「総てを正面から受け止め自ら信じるところに基づき正す」というひたむきな姿勢を肯定的に捉えた。それまでの下士官教員によるいじめに似た陰湿な体罰などとは根本的に異なる指導法である。そしてそれが後に航空自衛隊へと進み、幹部として部下指導の任に就かれた際、常に意識の底辺にあつたという。因みに氏は「一源三流の教え」(注2)を一家言として持っておられたが、中佐の生き様に正にその活模範を見た思いがするとも述べておられる。その氏が海軍士官の鑑であると思っておられた中佐の軍服を前にして衝撃を受け、暫くは足

一方、中佐はこの小林練習生達指導以前にも同じ霞ヶ浦海軍航空隊において、海軍兵学校第73期生を中軸とする第42期飛行学生の教官を務めておられ、その教え子の一人杉浦喜義学生(注3)も中佐の影響を強く受けた方である。詳しくは平成19年12月発刊「うみどり」会誌(注4)第28号記載「特別講話・特攻命令を受けた日」をご参照いただきたい。因みにそれによると昭和20年3月、氏が教官として百里ヶ原海軍航空隊勤務中、第601海軍航空隊攻撃第一飛行隊(以下K-1と称す)分隊長として中佐が硫黄島特攻作戦直後の壊滅した部隊再編のため国安隊長(注5)と共に香取基地より転進してこられたのである。当時氏は中佐の影響から同じ艦爆教程へ進み、練成訓練を経てマーク持ちとなったものほとんど全員が戦闘部隊配属となつたにもかかわらず、自らは教官配置、いても立ってもおれない思いで悶々とされていた時期であった。血書の辞世

の句(注6)をしたためるほどの熱血漢でもある。かつての教官と同じ道を歩むべく転属願いの直訴を決議するまでに時間は要さなかった。氏がK-1宿舎に国安隊長及び寺岡分隊長を訪ねたのは3月13日の夜であった。

切々と訴える氏の言辞が強くお二人の胸を打ったことはその後の極めて異例とも言える人事異動で明らかである。翌々日即ち15日付けて正式にK-1隊員として補職されたのである。言うまでもなくK-1は特攻を主眼とする部隊である。国家存亡のときに当たり、自らは間もなく出撃するが後に続く者が気に掛かる。誰でも良いというわけにはいかない。目標達成に向けゆるぎなき信念のもと、万難を排して成就しようとする強い意志と何者にも屈しない烈々たる闘志を併せ持った士官でなければならぬ。しかしながら貴様なら大丈夫だ。宜しく頼むとの言葉が辞令から読み取れる。そしてその日から間もない4月3日に中佐が、同7日には国安隊長が相次いで沖繩戦に出撃、散華されたのである。

氏はその後忠実に中佐の教えを体し、来たるべき出撃の日に備え、隊務に精励していた。そして迎えた8月13日、「特攻命令」を受け、中佐に続くべく飛行隊長指示後指揮所より掩体壕

内の搭乗機たる800キロ爆弾を抱いた「彗星」に向かう途上敵機による攻撃を受けた。幸い無事ではあったが敵襲後天候悪化の故もあり出撃を延期となった。それが氏を現世に留めることとなったのである。中佐なかりせば艦爆搭乗員たり得たか疑問であり、いわんやK-1転属などあり得なかつたであろう。運命を感じざるを得ない。

(注1) 偶然求めた軍服の主が特攻散華された方であったと知り、伝手を通じて寄贈したもの。

(注2) 血はやたらに流すな。ただし男はいざという時血を流すことを恐れるな。汗は大いに進んで流せ。汗を流すことは自分にも他人にも役立つものである。涙は他人のために流せ。思いやりのある人こそ信じられる。

(注3) 海軍兵学校第73期海軍中尉。戦後海上自衛隊に進み累進、佐世保総監で退官されるまで遺憾なく実力を発揮、その人間性などから現在に至るも多くの方々より深く敬慕されている。元海将。

(注4) 海上自衛隊航空関係者(一佐以上のOB有志)によって構成、現在発足以来40年以上経過しており、元海幕長藤田幸生氏が同会会長である。

(注5) 海軍機関学校第51期国安昇。昭和20年4月7日特攻戦死、二階級特進、海軍中佐。

(注6) 大君の みたてとならん
こぞの春 花もつぼみの山桜かな
元旦 喜義

少年時代の中佐

これまで残された資料等に基づき、断片的とのそりしは甘んじて受けるにせよ、海軍軍人としての中佐につき、縷々披露させていただいた。それにより生真面目に過ぎる側面が見られるもの、自ら信じるころは断じて行うという強固な意志を持つ信頼に足る士官であったとの認識は持っていただけたものと確信している。そしてその気性は海軍兵学校時代及びその後の本人の努力により培われたものであることに異論を挟むつもりはない。しかしながら少年時代の中佐にもその萌芽が見られたのであろうか。それとどこにでも見られる奔放な少年時代を過ごされたのであろうか。いささか気になるところである。そこで少年時代の作文、俳句、絵画などの遺稿からそのあたりを検証してみたい。僭越ながら筆者表を加え掲載させていただくこととする。

○(中佐遺稿より)
・病院から父は帰った

能登原校 四年 寺岡達二
昨日の四時頃父は病院からかへりまして。帽子を深くかぶって、たんぜんを着て、杖をついた父の後から、うれしそうな母の笑顔が見えます。父が病気をしている長い間、病院にいてかいほうしていた母はやつれていました。いつかへるのかと長いこと待っていた私は、とびとびはしっていてもぶれつきたい気がしました。

そこへ本家のおばさんが来て、「元氣になつてもどつた。まあこれでくつろいだ」とうれしそう。「くつろぎました。長い間おせはになりました」と母が礼を言われます。それからおばさんは父に向かって「元氣になつて、もうせはあないなあ」「元氣になつて、くつろいだがやあ」

そこへしん類の人がおほぜいやつて来ます。向ふのおばさんが、「あにやんがもどつたと言うがぐあひはどんないなかやあ」と母にとつていられます。「じゅんによくなつて先生がもう帰つてもよからふと云われたので今日やつと帰りました。こちらで枝広の先生にやつてもらはうと思つています。」おばさんは「それはよい。ねつはどれ位あるの」と、でも父の顔色を見てし

んばいそうです。

日がくれました。みんなうれしく、はなしをしながらお夕はんを食べました。

沼隈郡教育会編 児童文集 第二輯

(尋常科)より

(評) お父さんの帰られたときの君の喜び、近所の人々の親切な様子が目に見えるようです。だが病氣上りのお父さんの顔色などもっと書いてほしかった。

(注) 「本書は沼隈郡教育委員会傘下の小学校より1学級1文の代表作350点を提出せしめ、これを予選会にて250点に絞り、さらに本選会にて96点を厳選して掲載したものである」との記述が巻末にある。

(筆者評) 晴天の霹靂であった父の入院。あの日以来小さな胸を痛めていた。いて当たり前、それまで気にも留めたことがなかった両親の存在、それが：。父、そして介護のため共に病院へ行った。母がいなくなつて久しい。食事の準備や掃除など留守宅は兄の指導のもと二人でしっかりと守ってきた。しかしながら気が張り詰めていた当初はともかくこれだけ長くなると日中は良い、ただ夜が更けてくるとどうしてもしびしくなる。そのような時、兄が優しく声をかけて慰めてくれた。曰く

「もう少しの我慢だ。辛抱しろ。必ず元氣になったお父さんお母さんが帰ってくるから。ところで、今日学校でこんなおもしろいことがあったぞ云々」と。そうはいってもちゃぶ台で元氣よく「いただきまあーす」と声を出して箸に手をつける時も「いってきまあーす」と大きな声をかけて学校へ出かける時も、兄の声はしても聞き慣れた父母の声はない。いなくなつて初めて知つた父の大きさ頼もしさ。そして母のやさしさありがたさ。その父母がそろつて病院から帰つてきたのである。うれしかった。周囲の手前、飛びついてゆくのは我慢したが、大勢の人に囲まれにこやかに話す父母の手を取つて一刻も早く話がしたかった。兄と二人で家を守つてきた時のこと。学校であつたこと等々。もう寂しくなんかない。以前のように家族4人がそろつて楽しく暮らすことができるの安堵感と今後の期待に輝く達二少年の顔が言外に見える。

そしてその喜びの気持ちは、最後のフレーズ、「日がくれました。みんなうれしくはなしをしながらお夕はんを食べました。」のくだりに集約されている。簡潔な文章の中に言いたいことをすべて織り込んだ手法は大したものである。小学校の四年生時代の作品で

ある。改めて中佐の感受性の強さ、観察力、そして、それを的確にまとめる表現力の巧みさを知らされた思いがする。

○(中佐遺稿より)

「俳句二題」二年二組 寺岡達二

・野道行く 遍路の肩の 夕日かな
・螢火の 写る水面に 蛙鳴く

(筆者評)

兄良二氏の影響であろう達二少年の文学作品には目を見張るものがある。何気ない日常生活の一片を切り出して言葉に置き換える。しかしながらその作業は言うに易く行うに難しの例えどおり簡単なものではない。否、人によつては非常な苦痛を伴うものでさえある。特にそれらを凝縮、季節まで読み込まなければならぬとする俳句においておやである。それは研ぎ澄まされた五感に訴えかける句材探しから始まる。アングル、視野、色彩感覚から香りに至るまであらゆるものが対象になる中、それから受けた感動を自らが持つポキッブラーリに託して読み上げる。そしてそれらはすべてその人の持つ知性及び感性に裏付けられたものである。

兄良二氏が文芸誌を常に賑わせる優れた技量を持つ歌人であつたことは既

に述べたが、達二少年も兄に劣らず非凡なものを持つていた。本作品二題にその片鱗を見る。

一作目は、自らの業を修行によつて浄化すべく晩秋の野道をゆく遍路と少年、そのさりげない邂逅を読み上げたものである。とはいいつつも、何気ない日常の一コマに無常観を漂わせた作風に非凡なセンスを垣間見た思いがする。悲しみとは、喜びとは、そして今生きて生きるということとは……。生きてし生けるものすべてが無常の現世において生きるために背負つてきたしがらみ。良きにつけ悪しきにつけ自らの持つ業、因縁を断ち切るべく修行を続ける遍路、ひるがえつて何不自由ない身ではありながらも物思う年頃にさしかつた少年、彼の心の目に映つた真実とは。何を悩みまた何を求めて歩み続けるのか。ただ一人暮れなすむ野辺をゆく遍路、間もなく陽は落ちて暗くなるが今夜の泊まりのあてはあるのだからか。食べるものは。先ほどずれ違つたときの顔色は良くなかつた。このまま行脚を続けても良いのだろうか。いつた少年の心に浮かんだ疑念の数々。それが彼をそつと振り返らせた。そして見た。いまでも峠のかなたへと没しつつかある夕日が遠ざかりゆく遍路の肩越しに赤々と燃え立つのを、彼は

あたかも後光を背負った仏であった。凝然とその場に立ちつくしたまま去り行く遍路を見つめる少年と長く伸びた遍路の影。わずか17文字に託されたこの表現。さりげない日常生活の中から句材以外のすべてを大胆にそぎ落とし、野道、遍路、夕日に無常観を重ね合わせた巧みな描写に非凡な作風を見た思いがする。

二作目は、何もない漆黒の画布に光と音そして初夏のおいまで織り込ませたまさに三位一体の句である。姿を見せない蛙と声を出さない螢、両者を「写る水面に蛙鳴く」としたところに表現の妙を見た思いがする。

陽が落ちて暗くなった行く手に水をいっばいたたえた水田が鈍い輝きを見せる。畝を踏まないように気をつけながら畦道を進む。人の通過に驚いたのか足元から次々に起こる蛙の水音、四周は絶え間ない彼らの合唱である。そして見えた。宙に舞う螢が。かそけくも彼らが放つ明かり。それが進むにつれて数を増す。畦道の突き当たりとなる場所になると足元からさらさらと瀬尾とが聞こえてきた。川である。そしてその対岸、いちだんと暗くなったあたりで彼らの乱舞は始まっていた。揺れる水面にこぼれる光。それぞれの軌跡が明滅しつつ点が線となり、あるい



中学2年生の時の作品

きたところであるが、さらに進んで中佐の審美眼につき中学校時代の絵画をつうじて検証してみた。

口絵の作品をご覧いただきたい。水彩画である。さりげなくお茶の間のテーブルの上に並べられた日用品。大きなヤカンときゅうす。あてやかな模様の入ったお茶葉入れ。そして当時としてはモダンな茶器。それらが繊細なタッチで描かれ、配色も素晴らしい。じつと見詰めていると静かな休日の昼下がり、遠くから聞こえてくる子供たちの喧騒をよそに、画用紙に向かい一心に絵筆を揮う達二少年の胸の鼓動まで聞こえてくる。そのような気がする。日常生活から切り出された一枚の絵。それがほのぼのとした和やかさに包まれた寺岡家の当時の様を今に伝える。

トレートに作品に投影される。もの真髓を見極めたいとする知性に裏付けられた感性。それらが見事なまでに融合、結実された秀作であり、中佐の人間性に触れた思いがした。

○(中佐遺作より) 通信添削

中佐は海軍兵学校を第一志望とし、受験勉強に取り組んでおり、その受験対策の一つとして欧文社の通信添削を取り入れていた。詳細に調査した訳ではないが、欧文社とは筆者の大学受験時代、「ラジオ講座」などで受験生の人気を集めていた受験誌「螢雪時代」の発行社たる「旺文社」の前身と思われる。英語、数学、国語の各教科につき添削指導を受けた。そして、それぞれに対し真剣に取り組んでいた足跡を今もなお大切に保管されている当時の答案用紙から垣間見ることができ。英語及び数学においては概ね高得点を得ていた模様であるが、作文中に一点、ユニークな答案があったので以下に紹介する。

・題「私の写真」(以下八百字詰原稿用紙)

ぱっちりと開い(た)瞳。きりきりとしまった口もと。やや高い鼻。これ等をおさめている瓜ざね顔。少し固くなっている様に見える肩。憎らしいま

○(中佐遺作より) 絵画

さて、中佐の文才については小中学校時代の作品を通じて改めて認識して

は大胆に、またあるいは繊細なタッチで漆黒の画布に奔放な絵筆を揮う。夏の夕べを幻想的に演出するそれ。まさに沼隈・能登原ならではの風物詩であった。そしてそれを感動の趣くままに17文字に託して詠んだ中佐のセンスの良さが改めて偲ばれる作品である。

でに立派な男らしい顔形(憎らしいま
で男らしさ)。これが僕の写真だ。こ
の写真を眺めていると何だか僕ではな
さそ(さ)うな気がする。母もそんな
気がすると言った。陰で鏡を出して見
較べて見たがやはりそんな気がする。
出かけているニキビ、これをつぶした
跡、濃ゆ(X)く生えている口髭、鏡
は飽く迄公平無私だと思ふと、聡明さ
うな美青年に写っている僕の写真が憎
らしい程だ。

受験の為に取(撮)った写真だが、
一点の非の打ち処がないのを見るとそ
ぞろ恐ろしくなる。こんな立派な顔、
堂々たる姿をしていてもはねられて了
ふのかなあ見事に、と思ふと：。ちつ
と一点を見つめているとその瞳には、
しっかりとやれよと我を我が身に悟(諭)
しているかの様に感じられる。笑みを
含んだ口もとにもそんなささやきが聞
こえる様だ。しっかりとやろう、いやや
らなければならぬ。

そんな尤もらしい事を考えながら見
ていると、ふっと写真が暗くなった。
ゴロゴロとなる雷の音。ピカッと光る
稲妻。夕立だ。夕立と夕暮れで暗い部
屋にパッと電灯がともった。僕はもう
一度じっと僕の写真を見つめた。(写
真の中の僕は電灯の光を見ている様
だったが。)

(注) (一)内は朱筆添削、及び削除部
分である。

(指導欄)

比較的よく整っている文である。自
分の写真を見て自分といふものに就い
て考えている気持ちがよく表現されて
いる。ただ文末に叙景的なものが欲し
かった。

(筆者評)

受験用として撮られた写真を前にし
ての自己評である。人生の岐路ともな
るべき入学試験である。不安と焦燥の
中で迎える一発勝負にかける受験生の
心境は昔も今と大きく変わるものでは
ない。中佐もごく普通のどこにでもい
る少年であった。普段着の中佐を垣間
見た思いがし、なぜかほっとする。

おわりに

猛将、闘将、知将・・・果たして読
者には中佐がどのようなジャンルの士
官として映ったであろうか。時に談論
風発、友人達と口角泡を飛ばして人生
論を戦わせ、また時には落日の海が見
せる色彩変化の妙に涙した、明朗闊達
かつ多感であったあの少年が・・・。

中佐がいかなる困難をも正面から受
け止めて立ち向かう勇氣と、一度やる
と決めた以上断固初心を貫く強い意志
を持ち、目標達成のためには不断の努

力を惜しまない士官であったことは誰
しもが認めるところである。そしてそ
の萌芽は、少年時代より既に芽生えて
いた。兄により啓開されたとはいへ、
福山誠之館中学校通学の道。一口にそ
うは言っても片道五里に及ぶ山中通学
は尋常なものではない。しかしながら
良くそれを成し遂げたばかりか、上級
学校進学の際には、当時難関と言わ
れた海軍兵学校合格を四修(卒業を待
たず四年修了)で決めた。また、俳句
や絵画に深い造詣があることから、優
れた観察力、洞察力も時として垣間見
える多彩な側面が中佐の魅力を引き立
たせ、今もなお少なからぬ人々から慕
われている遠因となつていいるのではな
いだろうか。

深山幽谷にあつて上昇気流を捉えつ
つ悠々と飛翔を続ける鷹、積極果敢、
知的で攻撃精神旺盛、しかも鳶のよう
に死肉を食らうこともなく、高潔で、
一度獲物と見るや躊躇なく突っ込む。
筆者には、それが在りし日の中佐に重
なる。

「海軍兵学校沿革」 海軍兵学校編
(復刻版明治百年史叢書 原書房
昭和43年8月)
「統海軍兵学校沿革」 有終会(明治

参考文献

「海軍兵学校沿革」 海軍兵学校編
(復刻版明治百年史叢書 原書房
昭和43年8月)
「統海軍兵学校沿革」 有終会(明治

百年叢書 原書房 昭和53年12月)
・「同期の桜」 海兵七十一期
柴 正文 七一会 昭和50年5月27日
石橋総合印刷(株)

・「統々同期の桜」 海兵七十一期
柴 正文 七一会 平成7年8月
15日 信行社

・「日本陸海軍の制度・組織・人事」
日本近代史料研究会 伊藤 隆編
1975年11月第4版 財団法人
東京大学出版会

・「児童文庫第二輯(尋常科)」沼隈
郡教育会

・「誠之」昭和12年3月福山誠之館中
学校誠之会

・「誠之」昭和13年3月福山誠之館中
学校誠之会

・「篝火」第六号1934年誠限会文
芸部発行

・「うみどり」会誌第28号 平成19年
12月

・「生徒作業簿」海軍兵学校

・「霞ヶ浦に翔きし 若鷺」飛練四十
一期霞空会 平成6年9月3日

・小林純男氏の筆者に対する書簡
・杉浦喜義氏の筆者に対する書簡

・「懐旧 杉山部隊」第601海軍航
空隊司令海軍大佐杉山利一著

天皇、皇后両陛下と富岡八幡宮

8月12日(日)、天皇、皇后両陛下は、東京都江東区深川の富岡八幡宮に参詣された。折しも、ロンドンオリンピックの最終日、男子マラソンの決勝とレスリング男子フリースタイル66キログ級の米満達弘選手(22歳、自衛隊)及びボクシング男子ミドル級村田諒大選手(26歳、東洋大職員)が共に金メダルを獲得し、その興奮に沸く中、東京・下町の深川・富岡八幡宮では3年に1度の「深川八幡祭り」(江戸三大祭りの一つで、夏の真つ最中に行われるため、各町内神輿の連合渡御の際には、沿道から盛んに水がかけられ、水かけ神輿の異名があり、また、江戸時代から大相撲の勧進元で、境内には、江戸時代以来代々の横綱、大関の刻名碑があり、日本一の千貫神輿も祭られてい



神輿の担ぎ手らに手を振られる天皇、皇后両陛下(12日午後、東京都江東区の富岡八幡宮で) 一代表撮影

る)が斎行され、12日は祭り最大の行事「各町神輿連合渡御」の日で、彌が上にも興奮と熱気に包まれた。

天皇、皇后両陛下には、八幡宮御参詣とともに、67年前、昭和20年3月10日の東京・下町大空襲の体験者と懇談された。懇談されたのは、江東区(当時の深川区、城東区)内の80〜86歳の年寄りと山崎孝明区長の計4名とで、両陛下は、焼夷弾を避けて逃げ延びたという体験談を傾聴され、「そういう経験を伝えていくことが大切だと思います」と、お述べになられたという。その後両陛下は、50基余りの各町神輿が街を練り歩いた後、表参道から宮入りをして高々と上げられる様を御覧になり、担ぎ手始め見物の民衆に笑顔でお応えになられた。

富岡八幡宮を含む江東一帯は、東京大空襲で焦土と化し、昭和天皇はその直後、八幡宮境内から周辺の被災状況

を視察された。その3年後に「深川八幡祭り」が再開されると、氏子らは、8月15日の終戦記念日に、神輿を担いで皇居に向かい、復興の報告をした、ということであり、戦後復興の象徴とも言える、この伝統ある大祭りに、両陛下がお揃いで行幸・啓されたことは誠に有り難く、今次東日本大震災の被災者にとっても、大いに励みとなることであろう。

(飯田正能記)

回天の追憶と祈り (抄その四)
鳥巢 建之助

【編注・筆者は海軍兵学校58期の海軍中佐で、昭和5年海兵卒、水雷学校高等科、潜水学校乙種、甲種などを修了し、呂65潜、伊165潜の両艦長、第11潜水戦隊参謀を歴任。19年海軍大学校甲種学生を経て第6艦隊水雷主務参謀となり、戦争末期には回天特攻作戦担当参謀を務めた。戦後は回天や潜水艦に関する多くの著書を執筆されたが、実は、鳥巢さんは海兵に入られる前1年間、編者と同じ旧制福岡高校に在学しておられる。修猷館中学から将来の学者を目指して福岡高校理科(3回生)に入学されたが、父親から「男の兄弟が多い中で一人も軍人を出して、いないのはお国に対して申し訳ない、

お前が軍人になってお国のために奉公してくれないか」と懇願されて、海兵がって、旧制福岡の同窓生に準じた扱いで、同窓会の会合にも度々出席され、卓話を拝聴したこともある。

表題の小冊子は、平成11年5月、同窓会月例会の卓話(演題「私の海軍生活の思い出」)の際に頂いたもので、その前年、鳥巢さんが卒寿を記念して纏められた私家版(A5判58頁)で、特に、回天特攻隊員の慰霊顕彰に関して書き残された貴重な資料でもあると思われるので、その一部を紹介させていただきます。既に本誌『特攻』第81号(平成21年11月発行)、第82号(平成22年2月発行)及び第84号(平成22年8月発行)に、それぞれ所要の箇所を掲載済みである。」

二 黒木、仁科両人との初対面

昭和十九年七月中旬の夜、この日は、呉鎮守府の講堂で、第六艦隊主催の「あ号作戦における潜水艦戦研究会」を、呉に残留していた参謀長仁科宏造少将の主催で行われた後のことであったが、私は唯一人旗艦筑紫丸に帰り、作戦室で、苦悩と疲労の心身を投げ出していた。するとノックの音がした。「入

れ！」と怒鳴った。取次が暗号電報でも届けにきたのだろうと思ひ、振り向きもしなかった。すると、凜とした若者らしい「入ります」という声とともに二人の若い士官が入ってきた。私は思わず立ち上がり、この二人を凝視した。そして何か息を呑む思いを感じた。それは名状し難い、真剣勝負にも似た雰囲気であった。

二人はP基地の黒木大尉、仁科中尉と名乗った。そして、やがて黒木大尉は、「参謀に見てもらいたいものがあります」と口を開いた。

「見てくれ！何を？」

「特攻兵器です」

「特攻兵器？」

私はそれまで、〇六兵器(後の回天)のことは全く知らなかった。既に数カ月前、中央で試作方針が決定し、呉工廠の極秘工場でその設計、製造が進行中で、間もなく完成する状況にあることを、その時知ったのである。

私は腕を組んで、じつと黒木大尉の話を聞いた。戦局のこと、このままでは日本は滅亡の外ないこと、今にして何か決定的な手を打たなければ悔いを千載に残すこと、私たちは勿論作戦全般のことをとやかく言える立場にない一戦闘員に過ぎないが、我々は我々の立場で最善と信ずることをやりたい、

それには何時でも命を捨てる覚悟であること、しかしささやかな命ではあるが、捨て甲斐のある方法で捨てたいこと、そのためには「一死千殺」の兵器を考えざるを得なかったこと、などなど真剣な口調で語った。この間、仁科中尉は一言も口を開かなかったが、真剣な眼差しで私を射すくめているようであった。

話を聞きながら、私は頭の中で、特攻兵器という言葉がぐるぐる回りをしていた。

実を言うと、特殊潜航艇といい、特四内火艇といい、震海といい、私はこれまでの水中特攻兵器に類するものには反対してきたし、むしろ反感さえ持っていた。

潜水艦自身が持っている十数本の魚雷活用を差し置いて、背中に載せた別の特攻兵器を局地に運搬してやるような奇襲作戦は、潜水艦戦の邪道であり、労多くして功少ない戦術だと考えていた。そして広い洋上での補給路遮断作戦こそ潜水艦戦の本命であり、それに徹することが、潜水艦を活かす道であると考えていた。ところがこの考えも、

連合国軍の徹底した対潜水艦戦の前では大きく揺らぎ始め、何か新機軸はないかと、藁をも掴む気持ちで湧き始めていたのである。

明日、P基地を訪ね、詳しく話を聞くことを約し、二人は去ったが、その夜は眠れなかった。

レーダーを装備した飛行機、レーダー、ソナー、爆雷、ヘッジホッグなどを縦横に駆使して襲いかかってくる敵の対潜掃討隊のために、海底に葬られてゆく潜水艦や乗員の最後が想像された。また約二年前に経験したインド洋での敵船撃沈後、航空機からの吊光

投弾投下とその後の駆逐艦三隻の包围、ソナーでの捜索のことが想起された。また約三カ月前トラックの六艦隊司令部に着任の後、今は亡き潜水艦長

たちとの真剣な対話が思い出された。更にそれから約四カ月間の潜水艦の悲慘極まる最後を思った。

開戦以来既に三年になろうとしている潜水艦の本質は全く無視されてきたとしか考えられない。潜水艦戦は失敗の連続であった。しかも反省のかけらもなく既に潜水部隊は壊滅状態に近かった。

次の朝、私は二人の若人の真剣さに打たれ、実情を知りたいと内火艇で音戸の瀬戸を通りP基地に到着。黒木、仁科二人の部屋に案内され、早速一枚の青写真を見せられ、詳細な説明を聞いた。その概要は次のとおりである。

兵器の構造と主な性能。長さ

十四・七メートル、直径一メートル、総重量八トン。上げ下げ自由な一メートルの特眼鏡を備え、潜航、浮上、変針、変速は自在、また自動的に一定の深度、速力で直進できる。行動性能は三〇ノットで二三キロ、一〇ノットで七八キロである。頭部に一・六トンのTNT爆薬が装備されている。乗員は一人である。

仔細に検討してゆくと、従来の特殊潜航艇とか、特四内火艇とか、軍令部でこれまで考えていた兵器とは雲泥の差、天地の開きがあった。しかもこの兵器は伊号甲、乙型潜水艦には四基、六基の搭載が可能であった。

私は初めて満足に近い兵器の説明を聞いた。そしてこの時、国難を救い得る可能性を秘めた兵器を知ったような感動を覚えた。

四 回天の出現とその戦法(菊水隊)

昭和十九年八月一日、水中特攻兵器

⑥は、正式兵器に採用が決定され、「回天」と命名されたが、その時点で現存していたのは、試作された三基のみであり、生産は遅々として進まず、また訓練部隊の態勢も整わず、戦える状態になるには相当の時間が必要なのは当然であった。だが軍令部第二部の黒島亀人少将以下関係者は、命令を出した

時点で既に戦闘準備が出来ているかの如き錯覚に陥っていたのではないかとと思われる節があった。「急いではこゝとを仕損ずる」という訓えがあるが、「回天作戦」の場合は、正にその典型であろう。

回天作戦の失敗は、実情を無視した軍令部の誤算に最大の原因があったと断ぜざるを得ないのであるが、それに最も当てはまる戦訓が第一次大戦におけるイギリスの戦車作戦にあったことを想起する。

○第一次世界大戦の戦訓

チャーチルは『世界大戦』の中で、戦車問題について次のように述べている。「最初の二十台の戦車は、私の抗議やアスキス氏及びロイド・ジョージ氏などの有力なる反対があったにもかかわらず、ソナムの戦闘において不用意に使用された。

戦車の数が少なく、試験的狀態であり、まだほとんど未経験のまま使用されたために、奇異と驚愕に伴う莫大な利益は、かくして徒勞に終わってしまった。この貴重な計画が、完全にしかも相当の規模の下に 実行されていたならば、確実に見事な大勝利を得たであろうに」

このイギリス戦車の場合、現地の戦場が誤りを犯したのであるが、回天

の場合は全く逆であった。

回天は、十九年暮れから二十年の春の時点において、日本海軍が保持する唯一とも言うべき起死回生の兵器であった。勿論あの戦局下、これが戦勝に結び付くとは思われないが、敵に大打撃を与え、連合国軍を震撼させ、有利な和平への道へ導く手段になる可能性を秘めていたと考えられる。(終戦直後、マッカーサー司令部のサザラン下参謀長の言からも、その可能性は絶無ではなかったであろう。)

このようなわけで、私はこの兵器の特質を検討し、とことんまで温存準備し、使用の時期と使用法を徹底的に研究すべきであると考えていた。ところが軍令部には残念ながらそんな深慮遠謀は皆無であったようである。

○焦り過ぎた軍令部員たちの短見

回天兵器が文書の上で出現したばかりの八月下旬、すなわち回天の訓練もまだ始められておらず、兵器そのもの見通しも付いていないのに、第二特攻戦隊司令官長井満少将は八月下旬軍令部から呼び出され、回天の第一次作戦につき、次のような要請が出された。

一 出撃予定は十月末、遅くとも十一月初旬を目途として回天の戦力化を図る。

二 出撃基数は十二ないし十六基。

三 出撃搭乗員は全員士官を当てる。

長井司令官(45期)は驚き、まだ訓練も開始しておらず、回天の生産は大幅に遅れており、到底中央の要望など言語道断であった。

司令官は、回天の生産が遅れていることを理由に、出撃予定を十一月下旬にされたい旨、強く進言したが、軍令部第二部長(恐らく黒島亀人少将と思われる。44期)は容れなかった。それは現実を知らない同士の話し合いであったが、司令官は紳士的に過ぎたし、部長は非常識そのものと言わざるを得なかった。

これを要するに、目先のことにこだわらず、大局を度外視した重大錯誤であったことは明々白々である。

元々回天のような全く初めて使用する隠密兵器は、小出し作戦は絶対禁物であり、訓練に訓練を重ね、万遺漏のない準備を行い、満を持して放たず、乾坤一擲を狙うべきであった。ところが、回天部隊の訓練は、やつと緒に付いたばかりであり、使用する回天の数も、練達の搭乗員もなきに等しかった。まず責めらるべきは、この必死必殺の特攻兵器を使用しようとする軍令部の責任者の真剣さの不足ではあるまいか。「作戦の要求だ!」という命令だけを出し、不用意に使用するなど、正に統帥の墮落であった。

今一つ、重大問題があった。それはこの作戦に対し重大な責任を持たねばならぬ第六艦隊司令部には、ほとんど連絡らしい連絡もなく、まして意見を聴く事など全くない状態であった。潜水艦作戦、回天作戦に関する失敗の原因の根は深かった。

この文(約五十五年前の回天問題)を書きながら、九十歳の老骨は、悲憤の涙を流す思いを禁じ得ないのであるが、至純至高の回天勇士が、全身全霊をかけて戦い、祖国を救おうとしていたのに、赤煉瓦の連中は何をし、何を考えていたのか、少なくとも中央の回天作戦担当者は、万難を排して、呉、徳山へ出張し、第六艦隊や第二特攻戦隊の責任者と膝を交え、この回天作戦を最大限に生かす方策を真剣に研究すべきではなかったか、と考えている次第である。

さて、横道にそれたが、回天作戦は、私の祈り、願いととは全く裏腹な動きを始めた。

十九年十月初め、第十五潜水隊の伊三六潜、伊三七潜、伊四七潜が回天搭載のための工事施工の訓令が届いたとき、第六艦隊司令部では、回天作戦が近々実施されることを初めて知ったのであるが、それから出撃までは正に火の車であった。

聯合艦隊命令に基づき、第六艦隊司令部で作戦計画が立てられ、十月下旬、呉在泊の旗艦筑紫丸で作戦打合せが行われた。

関係者多数が集まり、第六艦隊参謀長仁科宏造少将が開会の挨拶を述べ、この度の作戦部隊を回天特別攻撃隊と呼び、今回の作戦を玄作戦、出撃隊は菊水隊と命名されたと発表した。

次いで、先任参謀井浦祥二郎大佐が作戦計画を説明した。すなわち伊三六潜と伊四七潜はウルシー、伊三七潜はパラオのコッソル水道を、十一月二十日未明に攻撃することを告げた。こうして、回天特別攻撃隊の作戦は火蓋を切られた。

この作戦はすべて霞ヶ関(軍令部)と日吉(聯合艦隊司令部)の合作であったが、軍令部も聯合艦隊も第六艦隊も、また第二特攻隊もすべて、回天は局地奇襲をやるのと兵術思想に凝り固まっていたように思われる。

(以下次号)

日本解放 —田中内閣成立以降の 中共の対日工作要領—

編注・中国大使館の李春光一等書記官(45)が、外交官特権について定めたウィーン条約で禁じられた商業活動をしてきた事件で、警視庁公安部は5月31日、外交官の身分を隠して外国人登録証明書を取得したとして、李書記官を外国人登録法違反(虚偽申告)容疑などで東京地検に書類送検した。同公安部は、5月中旬、外登証を不正更新した外登法違反容疑などで李書記官の出頭を要請したが、中国大使館は同月23日、出頭を拒否すると回答し、李書記官は同日、成田空港から一時帰国した。

警視庁公安部の発表によると、李書記官は、人民解放軍傘下の外国語学校を卒業後、軍の情報機関「総参謀部第2部」に所属し、平成19年(07年)7月、経済担当の書記官として来日。翌20年(08年)4月、東大研究員と身分を偽って虚偽の住所などを記載した申請書を東京都葛飾区役所に提出し、外国人登録証を不正に更新した疑いがあり、翌21年(09年)8月、都内の貿易

会社の社員と偽って、東京入国管理局で研究員としての在留資格を更新しようとしたが、入管職員に外交官だと気付かれたという。李書記官は、08年1月に東大研究員として取得した外国人登録証を悪用し、外交官であることを隠して銀行口座を開設し、08年2〜7月、都内の健康食品販売会社から顧問料として毎月7万〜16万円が振り込まれていたほか、同社が香港に設立した関連会社の役員にも就任し、09年6月に同社から72万円が入金されていた。更にこの会社などを通じて複数の日本企業に対し、中国の農業特区への進出を呼び掛け、数千万円を投資させていた。

李書記官が関与していた農林水産省の対中輸出促進事業に関連する機密文書が外部に漏れていた疑いが持たれている。当時の農水省の筒井信隆副大臣が主導する中国への農産物輸出事業に、同書記官が深く関わっていた。

筒井副大臣は、農業団体や食品会社に広く呼び掛け、平成23年(11年)7月、中国進出を手助けする一般社団法人を発足させた。事業の構想段階から李書記官は副大臣室に入ったり、中国国有企業を紹介していたりしたという。この時期は、政府が環太平洋経済連携協定(TPP)交渉への参加問

題で判断を迫られていた。中国は米国主導のTPPの動きと日本の対応を警戒していた。そんな時期に、中国の諜報員が農水省の高官と会っていたというのであるから、その意図するところは明らかであろう。調査チームを設けた農水省は、速やかにその実態を明らかにし、詳しく国民に説明する責任がある。防衛関連企業との接触の事実も取り沙汰されている。

スパイ天国とも言われる日本で、官民組織の脇の甘さが突かれた事件でもある。政治家を始め、外交、防衛、通商その他の関係者は、官民を問わず、その身辺に忍び寄る諜報・工作員への警戒を怠ってはならない。

今年、昭和47年(1972年)9月29日、当時の田中角栄総理が訪中、北京で日中共同声明に調印し、国交正常化宣言、つまり国交回復が行われてから40年の節目の年である(日中平和友好条約は、昭和53年(1978年)8月12日に調印された)。

それにつけて、思い出されるのは、当時、中央学院大学の西内雅教授が極秘に入手して発表された、中国共産党の「日本開放」という対日工作要領である。昨平成23年1月1日発行の靖國神社社報「やすくに」に掲載された作曲家すぎやまこういち氏の「この素晴

らしい国日本を守ろう」と題する論考の中でも同様、「日本解体工作」について書かれている項がある。その中国共産党の対日解放工作組に対する指令文書の中に示された工作員に対する指導要領そのままの活動が、現在に至るまで、この日本で展開されているように思われてならない。

40年前、田中内閣の成立により、第一期対日工作の目標であった日中国交正常化が達成され、それ以降、第二期対日工作の目標である「民主聯合政府の形成」に向けて、粘り強く、着々と進められ、成果を得つつあるが、中共が対日工作の最終目標としているところは、「日本人民民主共和国の樹立—天皇を戦犯の主魁として処刑—（第三期工作の目標）」であることを、この指令文書は示している。我々は、このことを念頭に警戒心を弛めてはならない。以下に、昭和47年当時、中央学院大学西内雅教授が書かれた序文を含め、その「対日工作要領を紹介する。

なお、このことに関連して、すぎやまこういち氏は、前記論考の中で、次のように述べておられる。

「今、政治の世界、メディアの世界を見ておりますと、本当に日本だけの特殊な現象だと思えますが、日本の中に反日の日本人が相当数存在している

のです。私は、こうした実態を説明するときに「今の日本は、日本軍と反日軍との内戦状態にある」という言い方をしますが、現在の日本の危機的な状況を理解していただくには、その方が分かりやすいと思つて、敢えてこうした表現にしています。

その意図するところを申し上げますと、諸外国を見た場合、例えば、アメリカの政治の世界でも、時の政権に対して断固反対の行動を起こす政党や政治家、民衆がいる。しかし、政策に反対する勢力があつても、彼らは決して反米ではないですね。つまり、アメリカの政治、あるいはメディアの世界では、大議論を戦わす勢力の争いであつたとしても、どちらも決して反米ではなく、基本的には愛国者のせめぎ合いなのです。こうした構図は、一部の国を除いては、ごく普通のことだと思います。

ところが、驚くべきことに、日本では、愛国心のない反国家勢力の、いわゆる「反日」の日本人が大きな勢力を持つていて、政治やメディアをはじめ教育界等あらゆる世界に存在しています。これは日本だけの異常な状態です。これは日本だけの異常な状態です。反日の彼らが最終的に目指しているものは、日本という国の解体です。こうした勢力から何とか日本を守るため

に、我々普通の国民である「日本軍」が奮起しなければならぬということ

「日本解放—田中内閣成立以降の中共の対日工作要領—」

○序 文

「日本解放」を公表する意義

—第二の蒙古襲来の警告—

一 北東アジアの旅で得たもの
この七月は、激動する世界の中で特に日本にとつて、重大なエポックを画する事件が起こつた。それは、七月四日の南北朝鮮の統一に関する声明、七月五日の田中角栄氏の自民党総裁当選による田中内閣の成立、それに続いて中共の対日国交の積極化、日本の朝野の中共への無秩序なムードの生じたことである。

筆者は、この直前に出発し三週間ほど、沖縄・香港・台湾・韓国を訪問して、朝鮮問題・中共問題などの現況を肌で知り、研究を重ねてきていたので、自分なりにこれらの変動を判断することができ、旅行のタイミングがよかつたと思つた。

これら北東アジアの各地で見られた共通の現象は、国家なり社会なりの若々しいエネルギーと、日本及び中共への関心である。日本に対しては日本

ブームとまで言えなくとも、少なくとも日本語ブームにわいていた。そして中共に対しては、不気味とか憎悪とかの気持ちを持ち、中共についての情報蒐集は、真剣そのものである。つまり、日本に対する依存、中共に対する防衛、これが北東アジアの生きるため自然の姿である。

このような北東アジア各地において、中共に関する資料を、たくさん手に入れることができた。その中の、毛沢東の指令なり発想なりの資料を蒐集し、専門的に分析している組織からもらつた、中国共産党の日本解放工作の要領を纏めた資料を、帰京後三人の中共研究家に、別々に検討して頂いた。殆ど同じ言葉が跳ね返ってきた。「これは貴重な資料である。中共は日本に、復交三原則を丸呑みにさせた後、民主連合政権の樹立を目標に、この資料に書いてある通りの戦術をとつて、工作してくるに違いない。日本の朝野がうかうかしていたならば、遠からず中共の傘下に入れられて、気がついたときには、奴隷的な生活から逃れられないことになっているだろう。」ということであつた。

この「日本解放」の資料は、多年にわたる祖国の防衛とアジアの平安を祈念する至誠によって得られたもので

あつて、幕末における林子平先生の「海
國兵談」にも似たものがある。

二 中共は対日侵略を企てている

中共の国是は、世界共産革命の覇権
を握ることである。そのための戦略戦
術は、目的のためには手段を選ばぬ、
千変万化なのであるが、一九五〇年
の朝鮮戦争の後の基本戦略は、直接侵
略（武力戦）の意志と準備の下に、間
接侵略（思想戦・外交戦・経済戦）に
よつて相手国の秩序の破壊、人心の収
攬を計り、そのまま共産圏に組み入れ
ることを期し、若しも目的を達し得な
いときは、タイムリングを計らつて直接
侵略によつて、とどめをさすことにあ
る（拙著「日本の防衛」日本教文社発
行、「間接侵略」立花書房発行、参照）。

まっている。

三 田中内閣と中共の基本姿勢

この度の自民党総裁選挙に対し、中
共が直接間接に、田中角栄氏を支持し
たことは、目に余るものがあった。マ
スコミが殆ど全面的か、田中角栄氏支
援のキャンペーンを張つた観があつた
のも、この中共指令によると言われて
いる。

そして、中共は佐藤内閣に対し、復
交三原則を突きつけ、この三カ条を日
中国交の絶対前提としていたが、田中
内閣成立後間もなく、この三原則の第
三番目の、日華条約の廃棄につき柔軟
な態度をとるなど、日中国交を拙速に
やろうという方針に一変した。表面的
な面子をやかましく言うシナとして
は、これは、なりふりかまわぬ豹
変である。

中共がこのように、田中内閣をマー
クシ、日中国交を急ぐ理由はどこにあ
るのか、検討してみると、いろいろあ
る中で、大きな点は次の三項であろう。
a いわゆる米中ソの三大極時代、
中共は特にソ連に対して甚だしく
弱体であるのをカバーする為に、
政治的に日本を手中に入れる必要
が大きいこと（米中会談の結果、
更にその必要を増した）。

本の経済を利用する以外に道がな
いこと。

c 中共の江青、周恩来を中心とす
る劇しい権力闘争を、国民生活の
貧困と自由の喪失から起こつてい
る社会不安を、外交勝利で有利に
転換しようとしていること。

四 国難来るの自覚と対策とを

「日本解放」は、第二の蒙古襲来の
警鐘である。七〇〇年の昔には、兵甲
艦船という物的、物理的な目に見える
脅威であつた。然るに今日の攻撃は間
接侵略、特に思想戦であつて、而もラ
ジオ・テレビ・マスコミの発達した現
代では、どこからでも攻撃できるし、
また攻撃して来ているのである。つま
り、目に見えないムードの中に、自ら
が入つてしまうので、国難という判断
ができていく。

しかし、正しい日本の伝統に目覚め
た人々が、この「日本解放」を読まれ
たならば、必ずや第二の国難来ると思
起するに違いない。その自覚に立てば、
その対策は文永・弘安の役の応戦より
も、むしろ易々たるものがある。つま
り、現代は、心の争奪戦がポイン
トであるからである。

協力の名目で政府間貿易（実質は国民
の税金による無償供与）のシェアを
得ようとし、政府は財界と国内のムー
ドに押され選挙対策のテーマ、つまり
権力欲のために日中国交をもくろみ、
左翼は共産革命、つまり独裁政権のス
トップとして日中国交を画策している
のである。

これらの人心を正したならば、中共
の終局目的である「日本解放」、つま
り第二の蒙古襲来の防衛は、たちどこ
ろに出来る。

弘安の役（一二八一年）の防衛の後
に、将兵は三年待つて、元軍がやつて
来ねば、進んで日本から大陸へ渡つて、
膺懲してやると誓つた者もいた。いま
や我々は、中共の「日本解放」の防衛
をするだけでなく、進んで国際間の正
道に基づいて国交を開始するよう、中
共を指導するがよいではないか。それ
には、次の当然の諸項目を、中共に誓
約させればよい。

a 中共は、天皇戦犯処刑を公言し
ていたのを謝罪し、今後かような
侮辱をせぬことを固く誓うこと
（国交がある場合でも、元首を侮
辱すれば国交断絶となることは、
国際慣例でもある）。

b 中共は、日本を敗戦国扱いをす
ることを止め（新興国家を称する

しかし、日本の朝野は、中共の一方
的な工作に、うまうまとひつかかつて、
中共へ無条件降伏のムードとなつてし

b 経済的に前近代的な中共は、日

権力欲を刺激されて、愛国心・道義心
を失っている人が多い。財界は、経済

中共に対し、日本は宣戦したことではない、従って中共に負けたわけではない)、国際信義を中心とする互恵平等の国交を行い、従って日本の内政干渉や攪乱工作は一切行わぬことを誓うこと。

c 中共は、政治・社会態勢の相違を認めて、平和共存するという原則に徹し、特に中華民国を武力解放するとか、その前哨戦として日華条約の廃棄を強要したりしないことを誓うこと。

以上述べた理由によって、この「日本解放」を、日本の良識ある方々におくるものである。本文を蒐集し検討した方や機関名は、今後の活動の都合上、匿名にして欲しいとのことであるので、やむなく筆者の責任で公表することにしたことを御諒承願いたい。

なお、「本文」は、中共が解放工作組に指令する文章の形をとっているで、主語はすべて「中国共産党」であるから、注意して読んで頂きたい。

昭和四十七年七月三十日

中央学院大学教授 西内 雅

◇ ◇ ◇

○本文

日本解放

—田中内閣成立以降の中共の対日工作要領—

A 基本戦略・任務・手段

一 基本戦略

我が党の日本解放の当面の基本戦略は、日本が現在保有している国力のすべてを、我が党の支配下におき、我が党の世界解放戦に奉仕せしむることにある。

二 解放工作組の任務日本の平和解放は、左の三段階を経て達成する。

I 我が国との国交正常化(第一期工作の目標)

II 民主聯合政府の形成(第二期工作の目標)

III 日本人民民主共和国の樹立—天皇を戦犯の首魁として処刑—

(第三期工作の目標)

田中内閣の成立以降の日本解放(第二期)工作組の任務は、右の第II項、則ち「民主聯合政府・形成」の準備工作を完成することにある。

三 任務達成の手段

本工作組の上記の任務は、作業員が個別に対象者に接触して、所定の言動を、その対象者に行わしめることによって達成される。則ち、作業員は最終行動者ではなく、かくれたる示威者、

見えざる指揮者であらねばならない。以下に示す要領は、すべて、対象者になさしめる言動の原則を示すものである。

本工作の成否は、終始、秘密を保持し得るかどうかに、かかっている。よって、作業員全員の日本入国身分の偽装、ならびに、工作上の秘密保持法については、別途に細則を以て指示する。

B 工作主点の行動要領

第一 群衆掌握の心理戦

駐日大使館開設と同時になされねばならないのは、全日本人に中国への好感、親近感をいだかせる、という、群衆掌握の心理戦である。好感・親近感をいだかせる目的は、我が党、我が国への警戒心を無意識のうちに棄て去らせることにある。

これは、日本解放工作成功の絶好の温床となると共に、一部の日本人反動極右分子が発する「中共を警戒せよ! 日本支配の謀略をやっている」との呼びかけを一笑に付し、反動極右は益々孤立するという、二重の効果を生むものである。

そのために、以下の各項を速やかに且つ継続的に実施する。

一 展覧会・演劇・スポーツ

中国の書画、美術品、民芸品等の展覧会、舞劇団、民族舞踊団、民謡団、

雑伎団、京劇団の公演、各種スポーツ選手団の派遣を行う。

第一歩は、日本人大衆が中国大陸に對し、今なお持っている「輝かしい伝統文化を持っている国」、「日本文化の来源」、「文を重んじ、平和を愛する民族」というイメージをかきたて、更に高まらせることである。

我が国の社会主義改造の誇るべき成果についての宣伝は、初期においては少ない方がよく、全然触れなくても構わない。

スポーツ選手団の派遣は、ピンポンの如く、試合に勝ち得るものに限定してはならず、技術的に劣っている分野の選手団をも数多く派遣し、日本選手に学ぶという率直な態度を示して、好感を勝ち取るべきである。

二 教育面での奉仕

a 中国語学習センターの開設

全国都道府県の主要都市のすべてに「中国語学習センター」を開設し、教師を無報酬で派遣する。教師は、一名派遣の場合は女性教師、複数の場合は男・女性半々とし、すべて二十歳台の作業員を派遣する。

受講者資格は、もとより無制限とし、学費は無料又は極めて少額とする。

b 大学への中国人中国語教師の派遣申入れ

中国語学習センターを開設し、日本人青年層に中国語学習熱が高まったところで、私立、公立の大学には個別に、国立大については日本政府文部省へ、中国人中国語教師の派遣を申し入れる。

申入れを婉曲に拒否した場合は、「我が国の純然たる好意、奉仕の精神に対する非礼」を責めれば、日本のマスコミも、大衆も、学生も許さないであろう。

しかし、第一回で全勝を求める必要はなく、全国大学の過半数が受け入れれば、それでよい。あとは自然に受入れ校は増加して行くものである。

c 留学生奨学金

毎年、二千名の日本の高校卒業生に対して、必要費用全額無条件給与の奨学金を発給し、我が国の大学へ留学せしめる。第一年度の応募状況により、第二年度の人数を五千名以内まで増加してよい。

三 「委員会」開設

「中日文化交流会」を拡充し、中日民間人の組織する「日中文化教育体育交流委員会」を開設して実施せしめ、我が大使館は、これを正式に支援する方式をとる。

なお、本項のすべての項目は、初期においては、純然たる奉仕に終始し、

いささかも、政治工作、思想工作、宣伝工作、組織工作を行ってはならない。

第二 マスコミ工作

大衆の中から自然発生的に湧き上がって来た声を世論と呼んだのは、遠い昔のことである。次の時代には、新聞、雑誌が世論を作った。今日では、新聞、雑誌を含めいわゆる「マスコミ」は、世論造成の不可決の道具に過ぎない。マスコミを支配する集団の意志が世論を作り上げるのである。

偉大なる毛主席は「およそ政権を転覆しようとする者は、必ずまず世論を作り上げ、まず、イデオロギー面の活動を行う」と教えている。田中内閣成立までの日本解放(第一期)工作組は、

事実で、この教えの正しさを証明した。日本の保守反動政府を、幾重にも包囲して、我が国との国交正常化への道へと追い込んだのは、日本のマスコミではない。日本のマスコミを支配下に置いた我が党の鉄の意志と、たゆまざる

不断の工作とが、これを生んだのである。日本の保守反動の元凶達に、彼ら自身を埋葬する墓穴を、彼らみずから

の手で掘らせたのは、第一期工作員である。田中内閣成立以降の工作組の組員もまた、この輝かしい成果を継承して、更にこれを拡大して、日本解放の勝利を勝ち取らねばならない。

一 新聞・雑誌

a 接触線の拡大

新聞については、第一期工作組が設定した「三大紙」に重点を置く接触線を堅持強化すると共に、残余の中央紙及び地方紙へと接触線を拡大する。

雑誌、特に週刊誌については、過去の工作が極めて不十分であったことを反省し、十分な人員、経費を投入して掌握下に置かなければならない。

接触対象の選定は「十人の記者よりは一人の編集責任者を獲得せよ」との原則を守り、編集者を主対象とする。

b 「民主聯合政府」について

「民主聯合政府」樹立を、大衆が許容する温床を作り上げること、このための世論造成、これが本工作を担当する者の任務である。

「民主聯合政府」反対の論調を上げさせてはならぬ。しかし、いかなる方式とを問わず、マスコミ自体に「民主聯合政府」樹立の主張をなさしめてはならない。これは、敵の警戒心を呼び

覚ます自殺行為に等しい。

「民主聯合政府」に関連ある事項を全く報道せず、大衆は、この問題について無知、無関心であることが最も望ましい状態である。

本工作組の工作の進展につれて、日本の反動極右分子は、何等の根拠をつ

かみ得ないまま焦慮にたえ得ず「中共の支配する日本左派勢力は、日本赤化を進めている」と絶叫するであろう。これは否定すべきであるか?もとより否定しなければならぬ。しかし、否定は真つ正面から大々的に行つてはならず、計画的な慎重な間接的な否定でなければならぬ。「極右の悪質なデマで、取り上げるにも値いしない」という形の否定が望ましい。

c 強調せしむべき論調の方向

I 大衆の親中感情を、全機能を挙げて更に高め、蔣一派との関係は完全に断つ方向へ向かせる。

II 朝鮮民主主義人民共和国並びにベトナム民主共和国との国交樹立を、社説はもとより全紙面で取り上げて、強力な世論の圧力を形成し、政府にその実行を迫る。

III 政府の内外政策には常に攻撃を加えて反対し、在野諸党の反政府活動を一貫して支援する。特に、在野党の反政府共闘には無条件で賛意を表明し、その成果を高く評価して鼓舞すべきである。

大衆が、異なる政党の共闘を怪しまず、これになじむことは、在野諸党の聯合政府樹立を許容する最大の温床となることを銘記し、共闘賛美を強力に

なさしめるべきである。

IV 人間の尊重、自由、民主、独立の強調。ここに言う「人間の尊重」とは、個の尊重、全の否定を言う。「自由」とは、旧道徳からの解放、本能の解放を言う。「民主」とは、国家権力の排除を言う。「平和」とは、反戦、不戦思想の定着促進を言う。「独立」とは、米帝との提携の排除、社帝ソ連への接近阻止を言う。

二 テレビ・ラジオ等

a これらは、資本主義国においては「娯楽」であつて、政府の人民に対する意志伝達の媒体ではない。この点に特に留意し、「娯楽」として利用することを主点とすべきである。具体的な方向を示せば、「性の解放」を高くに謳い上げる劇又は映画、本能を刺激する音楽、歌謡等は好ましい反面、スポーツに名を借りた「根性もの」と称される劇、映画、又は歴史劇、映画、歌謡、並びに「ふるさとの歌祭り」等の郷土愛、民族一体感を呼びさますものは、好ましくない。

前者をより多く、後者をより少なく取り上げるよう誘導せねばならない。

b テレビのニュース速報、実況報道の利用価値は極めて高い。画面は事実を伝えるのではなく、作るものである。目的意識を持って画面を構成さ

せねばならない。

c 時事解説、教養番組等については、新聞について述べた諸点がそのまま適用されるが、これは極めて徐々に、少しずつ、注意深くなされねばならない。

三 出版(単行本)

a 我が国への好感、親近感を抱かせるものを、第一に取り上げさせる。風物写真集、随筆、家庭の主婦が興味を抱く料理、育児所の紹介など、受け入れやすいものを多面にわたつて出版せしめる。

b 社会主義、毛沢東思想などに関する理論的著作も好ましい。しかし、我が国の社会主義建設の成果、現況については、極右分子の誹謗を困難ならしめるよう配慮させねばならない。

c マスコミの主流から締め出された反動極右の反中の言論は、単行本に出路を求めているが、これは、手段を尽くして粉砕せねばならない。特に、社会主義建設の途上で生じる、やむを得ない若干のゆがみ、欠点について、真実を伝えると称してなされる暴露報道を、絶対に放置してはならない。

これらについては、誹謗、デマで両国関係を破壊するものであるとして、日本政府に厳重に抗議すると共に、出版社、編集責任者、著者を告訴して

根絶を期すべきである。

c 一般娯楽面の出版については「デンマークの進歩を見習え」として、出版界における「性の解放」を大々的に主張せしむべきで、春画、春本の氾濫は好ましい。

e 単行本の出版についての、今一つの利用法は「中間層文筆業者」の獲得である。「中間層」とは、思想的に純正左派、又は右派に属しない、中間の動揺分子を言い、「文筆業者」とは、おおよそ、文筆を以て世論作りに、いささかでも影響を与え得る者すべてを言う。

彼らに対しては、或は原稿料を与え、或は出版の支援をなして接近し、まず「政治的、思想的立場の明確さを欠く」中間的著作をなさしめ、徐々に我が陣営へと誘導する。

四 本工作組にマスコミ部を設けて、諸工作を統括する。

第三 政党工作

一 聯合政府は手段

日本の内閣総理は、衆参両院の本会議で首班指名選挙を行つて選出される。両院で議員総数の過半を掌握すれば、人民の意志とは関係なく、任意の者を総理となし得るのである。

一九七二年七月の現況で言えば、自民党の両議員中、衆院では約六十名、

参院では十余名を獲得して、在野党と同一行動を取らせるならば、野党聯合

政府は容易に実現する。しかし、この方式を取るならば、社会党、公明党の発言権を益するにとどまり、且つ最大の単独多数党は依然として自民党であり、この二点は、純正左派による「日本人民共和国」成立へと進む阻因となることは明らかである。

自民党のみではなく、社会党、公明党、民主社会党もまた、無産階級の政党ではなく、最終的には打倒されるべき階級の、敵の政党であることを忘れてはならない。

本工作組に与える「民主聯合政府の樹立」という任務は、日本解放の第二期における工作目標に過ぎず、その実現は、第三期の「日本人民民主共和国」樹立のための手段に過ぎない。

共和国樹立へ直結した、一貫的計画の下に行われる聯合政府工作でなければ、行う意味は全くない。

二 議員を個別に掌握

下記により、国会議員を個別に掌握して、秘密裡に本工作員の支配下に置く。

a 第一期工作組がすでに獲得した者を除き、残余の議員全員に対し、接触線を最少四線設定する。

b 右のほか、各党の役職者及び党

内派閥の首長、有力者については、その秘書、家族、強い影響力を持つ者の三者に、個別に接触線を最少二線設定する。

c 右の接触線設定後、各線を経て知り得る全情報を整理して「議員身上調査書」の充実を期し、公私生活の全貌を細大漏らさず了解する。

d 右により、各党ごとに議員を「掌握すべき者」と「打倒、排除すべき者」に区分し、「掌握すべき者」については「聯合政府の樹立にのみ利用し得る者」、「聯合政府樹立より共和国成立に至る過渡期においても利用し得る者」とに区分する。

ここに言う「打倒、排除」とは、その議員の党内における勢力をそぎ、発言権を低下せしめ、孤立に向かわせることを言う。

e 「掌握」又は「打倒」は、調査によって明らかとなったその議員の弱点を利用する。

金銭、権力、名声等、欲するものを与え、又は約束し、必要があれば、中傷、離間、脅迫、秘している私事の暴露等、いかなる手段を使用してもよい。

敵国の無血占領が、この一事にかかっていることを思い、いかなる困難、醜悪なる手段も厭うてはならず、神聖なる任務の遂行として、やり抜かねば

ならない。

三 招待旅行

右の接触線設置工作と並行して、議員及び秘書を対象とする、我が国への招待旅行を左の如く行う。

a 各党別の旅行団

一団体の人数は固定せず、実情に応じて定める。但し、団体構成の基準を「党内派閥」序列「年齢」「地域別」その他、そのいずれに置くかは慎重に検討を加え、作業員の主導のもとに、我が方に有利となる方法を取らしむるよう、工作せねばならない。

b 党派をこえた議員旅行団議員の職業、当選回数、選挙区、選挙基盤団体、出身校等を仔細に考慮し、多種多様の旅行団を組織せしめる。

c 駐日大使館開設後一年以内に、全議員を最低一回、我が国へ旅行せしめねばならない。自民党議員中の反動極右分子で招待旅行への参加を拒む者に対しては、費用自弁の個人旅行、議員旅行団以外の各種団体旅行への参加

等、形式の如何を問わず、我が国へ一度旅行せしめるよう工作せねばならない。

d 旅行で入国した議員、秘書のうち、必要な者に対して、国内で「C・H・工作」を極秘裡に行う。

四 対自民党工作

a 基本方針

自民党を解体し、多数の小党に分裂せしめる。

自民党より、衆院では六十名前後、参院では十余名を脱党せしめて、聯合政府を樹立するというが如き、小策を取ってはならないことは先に述べたところであるが、右派、左派の二党に分裂せしめることも好ましくない。これは、一握りの反動右派分子が、民族派戦線形成の拠点として、右派自民党を利用する可能性が強いからである。

従って、多数の小党に分裂する如く工作を進めねばならず、また、表面的には思想、政策の不一致を口実としつつも、実質的には権力慾、利害による分裂である事が望ましく、少なくとも大衆の目には、そう見られるよう工作すべきである。

b 手段

I 自民党内派閥の対立を激化せしめる。

自民党の総裁選挙時における派閥の権力闘争は常に見られる現象で、通常は、総選挙を経て若干緩和され、一つの党としての形態を曲がりなりに保ちて行く。今回はそれを許してはならない。

田中派と福田派の対立の継続と激化、田中派と大平派、三木派、三派の

離間、中間五派の不満感の扇動等を主点として、第一期工作組は工作を展開中である。

総選挙後、若干の変動があつても、派閥の対立を激化せしめるという工作の原則は変わらない。

II 派閥対立を激化せしめる最も有効なる方法は、党内の非主流派となつて、政治活動資金の調達に困難を生じている各派に、個別に十分なる政治資金を与えることである。

政治献金は合法であり、これを拒む政治家はいない。問題は方法のみであり、作業員からAへ、AからBに、BからCへ、CからDに、Dから議員又は団体へ、というが如くに間接的に行うの言うまでもない。

III 先に述べた、議員個人の掌握は、それ自身が聯合政府樹立の有効な手段となるが、派閥対立激化についても活用するのは、もとよりである。

五 対社会・公明・民社各党工作

a 基本方針

I 各党内の派閥闘争を激化せしめ、工作組による操縦を容易ならしめる。

派閥というに足りる派閥なき場合は、派閥を形成せしめる工作を行う。但し、党を分裂せしめる必要はなく、分裂工作は行わない。

II 日本共産党を含めた野党共闘を促進する。

b 手段

自民党の項に同じ。

六 「政党组织」で統轄

対政党组织は、「聯合政府樹立工作」の中心をなすものであり、本工作組に政党组织部を設け、その下部機構を、自民党班、社会党班、公明党班、民社党班の四班に分ち、各班ごとに派閥名を冠した派閥小組を設ける。

第四 極右極左団体工作

一 対極右団体

我が党の日本解放、日本人民共和国樹立工作を進めるに当たって、日本の極右団体に対する対策は必要であるか？必要だとすれば、いかなる対策を立てて、工作を進めるべきか？

第一に認識しなければならぬ彼我の関係は、彼等を利用し得べき中間層に属するものではなく、水火相容れざる敵であるということである。

では、彼等の現有勢力はどうか？東京における極右団体数派約百八十余、シンパをも含めて人数は約四十万、全国的には一人一党的なものを含めれば、約八百団体、総数百万未満で問題とするに足りない。

世論の動向はどうか？我が方は、いち早く「マスコミ」を掌握して、我に

有利なる世論作りに成功した。敗戦日本を米帝が独占領したことは悪質極まる罪悪であるが、米帝が日本の教育

理念、制度を徹底的に破壊し、国家、民族を口にするには、あの悲惨な敗戦をもたらし、軍国主義に直結するものであると教育せしめたことは、高

く評価されねばならない。極右は、かつて輝かしい成果を収めたように、「国家」「民族」というスローガンで民衆

に近づくと道被封じられているのである。否、彼等がそれを強調すればするほど、民衆は彼等から離れて行くのである。

八百に分裂し、マスコミを敵とし、直接に民衆へ呼び掛けても効果が上がらぬ彼等は、ツバサなきタカであるか？牙を失った虎であるか？工作の対象として取り上げるに値しないものであるか？

ここで我々は、日本解放工作の最も困難なる点、則ち、我が方の弱点の所在を承知しておかねばならない。

I 国会議員の過半数を工作組の掌握下に置き、国会での首班指名選挙で我が方の望む人物を選出させ、聯合政府を成立させることは合法行為である。

II 右は、日本人大衆の意志とは、関連なく行い得る。

III マスコミは、右の工作が順調に進むよう、背後に隠れて全面的に支援

する。右の三点から、聯合政府樹立については、極右勢力が、その阻害の素

因となる恐れはほとんどない。もし彼等が、聯合政府樹立前に武装反革命戦を引き起こせば、世論の総攻撃を受け、

日本官憲によって弾圧粉砕されることは間違いない。問題は、聯合政府樹立直後の民心の大変化にある。大衆は、「聯合政府—

共和国成立」という革命図式がデマではなく事実だと直感するであろう。彼等をだまし続けて来たマスコミへの怒り、彼等の意志を完全に無視して首班指名選挙を行った議員への怒り、生活

様式が一変するという恐怖感、これが組織されて爆発したらどうなるか？この時点で、統一された、組織ある

極右勢力が存在すれば、これほど大きな危険はない。彼等の微小な力「一」は、たちまちにして「百」「千」となる。

大衆は、彼等の武装決起に背を向けないどころか、それを望み、それに投じてであろう。

もとより、戦後の勝利は我が方に帰するが、一時的にせよ、内戦は避けられず、それは我々の利益とはならない。以上の分析に従えば、対策はおのずから決まってくる。

a 極右のマスコミ奪回の反撃戦に對しては、常に先手をとって粉砕せねばならない。

b 極右団体の大同団結、乃至は連携工作を、絶対に実現せしめてはならない。あらゆる離間、中傷工作を行って、彼等の感情的対立、利害の衝突を激化させねばならぬ。

c 各団体ごとに、早期に暴発せしめる。彼等の危機感をあおり、怒りに油を注ぎ、行動者こそ英雄であるとたきつけ、日本の政界、マスコミ界、言論人等の進歩分子を対象とする暗殺、襲撃はもとより、我が大使館以下の公的機関の爆破等を決行するよう、接線を通じて誘導する。

我が公的機関の爆破は、建物のみの損害に止め得るよう、準備しておけば実害はない。事後、日本政府に対して嚴重抗議し、官憲をして犯人の逮捕はもとより、背後団体の解散をなさしめ、賠償を要求し、マスコミには、全力を挙げて攻撃させ、人民の右派嫌悪感を更に高め定着させる。

d 右のため、必要な経費と少量の米製武器弾薬を与える。これは、蔣一派が日本の極右に資金、武器を与えたのである、と日本官憲に信じ込ませる如く工作して、二重の効果を生むよう配慮せねばならない。

e 本工作は工作組長自ら指揮する直屬機構「P・T・機関」をして実施せしめる。

二 対極左団体工作

a 学生極左団体は、一定任務を与え得ない団体（又は個人）と、一定任務を与え得るものとに區別して利用する。

b 前者には資金・武器を与えて小規模な武装暴動を頻発せしめ、全国的な社会不安を高めると共に、日本官憲をして奔命に疲れせしめる。

犯人及び直接関係者は、駐日大使館において保護し、必要がある場合は我が国の船舶で中国へ逃亡せしめる。

後者には、各界の極右分子中、我が工作の著しい阻害となる者に対しての暗殺、脅迫、一時的監禁等に使用する。その保護については前項に同じ。

d 前二項に関連して起きる、日本官憲による我が大使館への「犯人引渡し要求」又は「捜査への協力要請」は、その事実なく必要なとして断固拒否する。続いて、マスコミの全力を挙げ、官憲の不当を攻撃せしめ、日本政府へは、国交断絶も辞せずと圧力を加え、官憲の要求を制約せしめる。

e 逮捕された犯人に対する援助は、一切行つてはならない。また、その犯人との接触に使用した中間連絡者

に對しては、直ちに「P・T・機関」をして必要、適切なる処置を講ぜしめ、官憲の追跡捜査を許してはならない。

f 本工作は、対極右工作と共に「P・T・機関」をして実施せしめる。

第五 在日華僑工作

一 華僑の階級区分

約五万三千名に上る在日中国人は、現在の思想、言動の如何を問わず、本質的には資産階級、小資産階級に属する階級の敵であつて、無産階級の同志ではない。

しかし、日本人民共和国成立以前においては、彼等を「階級の敵」と規定してはならず、統一戦線工作における「利用すべき敵」に属する者と規定して、利用し尽くさなければならぬ。

二 工作の第一歩—逃亡防止
国交正常化が近づくにつれて、彼等は必然的に動揺し不安を感じる。不安の第一は我が駐日大使館開設後、祖国へ帰国させられるのではないか？その際、在日資産を処分して得た携帯又は送金外貨を帰国後、中国銀行に預金させられ封鎖されるのではないか、と不安である。

第二は、蔣一派支持の言動をとつていた者、及びいわゆる「台湾独立運動」に従事していた者の罪を恐れる恐怖不安である。

これに對し「居住の許可、私有財産の保護は日本政府の保証するところであり、中共大使館の干渉し得ざる内政事項であること」、「民主国日本においては、思想、言論の自由が保護されており、それが外国人に及ぶことは、国府大使館時代の実例で証明されること」等をあげて、第一期、第二期工作員ともに、彼等の不安解消に全力を挙げ、彼等に日本残留を決定せしめなければならぬ。

対在日華僑対策の第一歩は、彼等を掌握して利用するために日本へとどめることであり、決して台湾又は東南亜各地へ逃亡させてはならない。

三 工作の第二歩—青少年掌握
工作の第二歩は、華僑の小、中、高校、大学の生徒、学生及び青年を、先ず掌握することである。

a 駐日大使館開設と同時に、大使自ら各地の華僑学校へ赴き、祖国からの贈り物として、施設拡充に十分なる寄付金を無条件で与え使用させる。同時に、政治色のない図書類を大量に寄附する。

b 祖国から来日する、スポーツ選手団の試合、各種の公演、展覧会に、青少年を無料で招待する。

c 華僑学校へ女性の中国語教師一名を派遣する。この一切の費用は、大

使館で負担する。

教師は、初期においては、一切、思想、政治教育を行わず、忠実熱心な教員として全生徒の信望を勝ち取ること全力を尽くす。続いて、語学教育を通じて、全生徒に祖国愛を抱かせること、及び生徒を通じて自然にその家族の状況を知ることの二点を任務に加える。

教員数も、教員に与える任務も漸増するが、その時期を誤つてはならない。

d 祖国観光旅行派遣教員による生徒の掌握が進んだ時点で、祖国観光旅行へ招待する。このあと、次第に、政治、思想教育を行つて青少年を完全に掌握する。

四 国籍の取得

a 駐日大使館開設後直ちに、在日華僑の中国国籍の取得、パスポート発給申請の受理を開始するが、決して強押ししてはならず、且つ受理期間を制限してはならない。あくまでも、彼等が個人の意思で決定し、自発的に申請する、という形式をとらせねばならぬ。時間が掛かることは問題とするに足りない。

掌握せる青少年に「中国人が中国の国籍を取るのには当然のことである」との考えが徹底すれば、彼等は自然に両親を説得する。これは、青少年の自発

行為であり、子供と共に行動する親の行為もまた、自発行為であることは言うまでもない。

b 日本政府に対しては、「在日中国人の国籍問題について」の秘密交渉を申し入れ、下記を要求する。

I 在日中国人の日本への帰化を認めてはならないこと。

II 在日中国人で中国国籍を取得せず、無国籍者を自称する者に対しては、各人の在日居留期間が満期となる際、居留期間の延長許可を与えてはならないこと。

III 蔣一派の発給するパスポートを認めてはならない。その所持者に、日本居住を許可してはならないし、旅行入国をも認めてはならない。中国人について、二種類のパスポートを認めることは、二つの中国を作る陰謀に該当する、最も悪質な反中行為であると認めること。

五 中国銀行の使用を指定

a 在日華僑の大部分は商人であり、その年商総額は約一兆円に達している。駐日大使館開設と同時に、日本へ進出して各地へ支店を設ける中国銀行は、中国との貿易に従事するすべての日本商社に口座を開かせしめるほか、華僑については、その大部分の資金を中国銀行へ預金せしめる如く工作

せねばならない。

b 資産階級は狡猾無比で、資産を分散隠匿して保全を図る習性を持つ動物である。正面からの説得で、取引銀行を中国銀行一本に絞ることはあり得ない。

青少年の掌握、国籍取得がゆきわたる、日本政府が我が方の国籍問題についての要求を容れ、もはや我が大使館の意志に抗することが困難となった段階で、左の諸点を実施する。

I 「祖国の銀行を使おう」、「事実で祖国への忠誠を示そう」等のスローガンの下に、「中国銀行への預金運動」を華僑自体に展開させる。

青少年に運動の先鋒隊として宣伝、説得工作をなさしめると共に、父母の言動を監視せしめ、実行しない場合は摘発せしめる。

II 預金を中国銀行一本に絞らなければ、パスポートの有効期間の延長申請を大使館は受理しないであろう、と意識的なデマを口から口へと伝えて「延長申請が許可とならねば無国籍となつて日本に居住できない」との不安を煽る。

III 華僑仲間の密告を「祖国への忠誠行為」として奨励することを暗示する。

六 政治・思想教育

国籍を取得し、預金を中国銀行に集中せしめた後において、五万三千の華僑を、日本解放のための一戦力となすべく、政治教育、思想教育を開始する。

七 「華僑工作部」で統轄

本工作部に「華僑工作部」を設け、全工作を統轄せしめる。

C 総括事項

一 派遣員数・身分・組員の出身
本工作の組員は、組長以下約二千名を以て組織する。大使館開設と同時に八百名乃至一千名を派遣し、以後、漸増する。

組長以下全員の公的身分は「大使館員」「新華社社員」「各紙特派員」「中国銀行員」「各種国営企業代表又は派遣員」「教員」等の身分で赴日する。組員は、その公的身分の如何にかかわらず、すべて本工作組長のみの指揮を受け、工作組の工作に専従する。
組員は、一部の責任者、及び特殊工作を行う者のほか、全員、「第四八党校」日本部の出身者中より選抜する。

二 経費

本工作組の必要経費は、すべて中国銀行東京支店より支出される。中国銀行は、日本国内で華僑及び日本商社より吸収せる資金中、銀行業務の維持に必要な額を除き、残金は全額、本工作のために支出する。

華僑預金は、日本人民民主共和国成立後は、全額没収するものであるから、将来において預金者に返還することを考慮に入れておく必要はない。

本工作組長は、常に中国銀行東京支店、党支部書記と密接に連絡し、資金運用の円活を図らねばならない。

三 指令・関係文献の取扱

a 本指令、及び工作組織系統表、工作員名簿等の下達は、組長、副組長のみ限定する。

b 関係文献はすべて組長自ら保管する。

c 関係文献の復印、筆写は厳禁する。

d 工作組の各部責任者に対しては、訓練期間中に組長より、個別にその所管事項について、指令内容を伝え記憶せしめる。

e 組員に対しては、その所属する各部責任者が、その組員に担当せしめんとする事項についてのみ教育訓練する。
(「日本解放」終)

日本近現代史の真実

諸永 次郎

「編注・筆者は神奈川県に在住され、長年教育に携わった方で、日本会議などでも活躍しておられる憂国の士である。本誌『特攻』第81号（平成21年11月発行）にも、「田母神將軍の論文を読んで―父祖達を貶めてはいけない―」と題する御寄稿を掲載したが、この程また、表題の論考をお寄せ頂いた。」

◇ ◇ ◇

「原子爆弾の投下」1945年8月6日と9日、新しい兵器の効果を試すため、人類の頭上に炸裂させる人体実験を指令したのは、時の米国大統領トルーマンであった。言語を絶する残酷非道な、アウシュビッツをも遙かに超えたこの行為は、米国人自身その責めを未来に負う自信がなく、それを皆日本人に負わせようと工作を図った事実がある。

日本が「この犯罪に見合うような残酷行為をしたのだから、その当然の報いを受けたのだ」と事実には全く関係のない嘘の話を創作したのが、南京事件であり、植民地支配であり、従軍慰安婦話である。米軍単独ではその嘘話を信じさせるのも困難であったであろうが、それは元々戦時中のプロパガン

ダ話を戦後、中国人や韓国人の間に流布して、それを信じさせ、彼ら自身に糾弾させれば、その目的は達成できると米国は見込んでいた。

「東京裁判」そこには公正さや正義など一片もなく、ただ勝者がすべてを仕切る裁判劇がなされた。米国製西部劇の中でさえ嫌悪される、あのリンチを行ったのだ。被告側の言い分には、証拠の提出も認めず、一切耳を貸すことがなかった。また、占領時の罪意識扶植計画（War Guilt Information Program）も強制した。新聞を始め出版物の検閲制度、言論の統制制度が厳格を極めた。占領軍に不満な表現があれば、それを取り消させるだけでなく、その検閲の跡も残さぬよう、すべての刷り直しを命じた。日本側は印刷の無駄を避けるため、次第に検閲官の意向に沿うような表現に直す、自主規制を行って偏向意見だけが日本の社会を席捲することとなった。

占領中に国際法で禁止している、憲法の改正も実施した。その憲法前文には、「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と存在を保持しよう」と決意した」と記載されている。そして、この憲法が強制ではなく、日本人の発案であるかのように隠すことまで命じたのである。しかし我ら日本

人は、これがまともな日本語でないことを知っている。その「一字、一句変えてはならぬ」と命じられたものは、英語を母国語とする人物によって発案された証拠となつて残された。全くの国際法違反の証拠が、東京裁判とともにここにもさらされている。

この思まわしい憲法を、戦後もやがて70年にもなるのに、なぜ改正できなかったのか、憲法に書かれた改正条項の厳しさもさることながら、そこには占領軍による企みがあった。占領軍は戦時中に、共産主義の信奉者であるために公職を追われていた最高学府の教授達を一齐に追放して元の職に復帰させた。逆にそれまで大学や学会の頂点にいた教授達はGHQが発令した公職追放によって、一齐に職を追われ、歴史学会は、共産主義を信奉するいは共感する学者で占領されることになった。後に占領が終わって追放が解除になつても戦前からの学者は、共産主義シンパの学者達はその席を占めていて、元の職場に帰っていくことはできず、このため、日本の歴史学会は真つ赤に染まり、そのトップ学者の弟子達は全国の大学へ分配され、弟子が弟子を育てて、我が国の歴史観は真つ赤に偏向したものが国中に蔓延することになった。

赤い歴史観がなぜ駄目なのかは、論ずるまでもないことではあるが、彼らは国家の存在を認めず、一切の伝統や歴史の重みを知らず、社会のすべては理性で合理的に作れると思ひ込んでいて、家族愛も、郷土愛もなく、一切の私有財産も認めない。現実には有り得ない世界を夢想、空想する思想に過ぎない。それは70年にわたるソ連邦の実験で証明済みである。

今日、嘘話を事実だと思ひ込んでいる日本人が多いのには理由がある。これら歴史観の教授達に同調するように働いたのが、全国を統制していた、小学、中学、高校の日本教職員組合である。日本での戦後の米国の政策が如何に傲慢、杜撰で虚偽に満ちたものであったか、我らの憲法に書かせたような、公正と信義を重んじる諸国民がどこに在るのだ。韓国、中国、露国の性格は今日、眼前に見るとおりである。公正や信義から最も遠い国ばかりである。百年前からこれらの国々の性格は少しも変わっていない。これら隣国では公正さや信義など何の価値も認められていない。否、もしかしたら米

国から教わったように、日本を責め続けるのが公正で、信義に適うとも思ひ込んでいるのかも知れない。今の学校の教科書に何と記載されていようと

も、それが嘘であることを日本人は自身自身の頭で考えて欲しい。

人類の歴史を顧みる時、野生動物間での生存競争に近い闘争の時代より始まって、人類は知能を発達させ、文明と呼ばれるものを作ってきた。科学技術あり、哲学、倫理、宗教までも作り上げ、人類は他の動物とは違うのだと誇らしく語られ、学んできた。それは西洋白人種にとっての平等であり、自由であった。他の黄色人種や黒人の人々は、使役される牛、馬に近い存在としてしか認められていなかった。第一次世界大戦後のパリ講和会議で、日本代表はその人種差別の撤廃を提案し、多数国の賛成を得たが、こんな重要案件は全員の賛成が必要だと言つて、米国代表ウイルソンが反対して否決された。パリには多くの黒人達が驚喜、大挙して日本代表の応援に駆けつけていた。これを見た米国白人の政治家達は日本を滅亡にさらすことが、自分達が生存できる、唯一の道のように思ったに違いない。黒人の一斉蜂起は彼らにとって想像を絶することであった。

ここに見る米国白人の「恐怖心」、これが大東亜戦争へと道を継いだのであるが、日本の軍隊がとやかく言われたりするが、それは、反応の仕方が日本にとって最善ではなかったというに過ぎず、戦争の原因はそこにはない。米国人ヘレン・ミアーズは言う「米国では真珠湾攻撃を殊更取り上げるが、それ以前に米国は既に蒋介石を応援して支那大陸で日本と戦っていたではないか」と。「真珠湾が戦争の原因ではなさそうだ。自国民にまで嘘をついては、平和の達成が難しくなる」と嘆いている。

う考えればよいのだろうか。これこそが真実ではないのか。中国人のやり方は、百年前から変わらない。いつの間にか歴史までも作り変えてしまう。蒙昧な大衆を洗脳し先頭に立たせて横車を押し出してくる。それが常套手段である。日本の国連安全保障理事国入りに反対して中国の取った大衆煽動を思い出すがよい。ここで支那事変勃発の経緯について触れておこう。1937年7月29日、北支那の通州において、支那の地方部隊による200人もの在留邦人を一挙に虐殺する陰惨な事件が発生した。8月9日、大山勇夫中尉と部下の虐殺事件と続き、遂に同年8月13日、条約に基づき上海に駐留する、在留邦人の保護が目的の5千名弱の日本帝国海軍陸戦隊（軽装備しか有しない）を殲滅しようとして、突如総攻撃をかけてきた蒋介石の軍隊、それは30万とも40万とも言われる大軍で、ドイツ式兵器とドイツ軍事参謀によって訓練された精鋭部隊であり、その攻撃はソ連やドイツの応援も得た、国家の意思による「アグレッション」（侵略）の始まりであった。支那事変の勃発、侵略を仕掛けたのは蒋介石軍であつて、日本軍ではない。現在に置き換えて考えれば、駐留米軍に突如、日本の自衛隊が襲いかかるよ

うなものである。これでも事情が理解できない読者には、次の話を併せて考えてほしい。事件から2カ月後の10月14日、時のローマ法王ピオ十一世は、全世界のカトリック教会と信者に対して、「支那事変は日本の侵略戦ではなく、防共戦であるから、カトリック教会と信者は共産主義の危険がある限り、日本の防共努力に躊躇なく支援協力すべし」との指令を發した。この時ソ連と蒋介石政権との間では、不可侵条約や軍事援助協定などが秘密裏に結ばれていた。韓国人も最近では、中国人の手法を見習って日本に迫って来る。国家間で決着済みの問題でも自国民に理解させよとの考えなど毛頭なく、小学校からの教育で、自国民の洗脳を始めた模様である。大衆の暴走を利用して、求められるままに何時でも為政者の都合で日本に新たな要求をして来る。条約等では約束のできない国家である。元々韓国の植民地など存在しない。国家間の平和裡の条約締結の結果合邦したのであつて、コロナイゼイションではなく、アネクセイションであつたのが事実である。台湾の方々はその違いをはつきり理解しておられる。それを韓国では意図的に曲解させ、日本が植民地にしたのがいけない、その補償だと

して次々と新たな要求を出す幼児のような国家である。そんなことを言い出したら、逆に合邦時に日本から注ぎ込んだ建設の資金は皆利子を付けて返却してもらわねばなるまい。植民地に資金を投入して建設を助けた国など世界のどこにも存在しない。国家としての自尊心はどこにあるのであろうか。

慰安婦の問題にしても、当時は世界で、売春は公認の商行為であった。商行為のため戦地に行った人は韓国、朝鮮人に限らない。日本人だっていたのである。強制的に集められたなど、全くの作り話である。こんな作り話に頼って、何らかの利益を得ようとは、哀れと言うか、情けない国家である。戦後これらの国家を益々横暴にしたのが、冒頭に記した「原子爆弾の投下」及び日本全国都市への「無差別絨緞爆撃」の明らかな人道に反する罪から逃れようと画策した米国の卑怯な行為や中国人、韓国人の喜ぶ「嘘話の創作流布」があるように、私には思われてならない。正義の国と自負する米国が二度にわたって恐怖の中で理性を失い、取るべき行動を誤ったもので、その日本への被害は言語に絶する。

第一次世界大戦後のパリ講和会議にイギリス代表として出席していた、二十世紀に著名な経済学者、ケインズ

はドイツへの膨大な賠償提案に一人で反対の論陣を張ったが受け入れられず、代表を辞している。もし当時、日本の人種差別撤回の提案に賛成せずとも、せめて世界がケインズの論に耳を傾けていたらその後の世界史にヒットラーも誕生せず、第二次世界大戦も起こらなかったかも知れないと思う。

世界中の国々が自国の利益だけに固執する状況は、当時も現在も殆ど変わらない。我々日本人は眼前の世界を直視し「平和がいい、平和がいい」と言い続けるだけでは、逆に侵略される隙を与えるだけで、平和に何らかの寄与を篤と思ひ知る必要がある。そして、我々は日米両国民の心からの和解を成さなければならぬ。そうでないと、同盟も強固なものには成り得ない。

また、日本人が戦ったあの大東亜戦争によって、アジアの国の多くが西欧列強の植民地支配から脱却した、この世界の歴史を一步前進させた事実を思う時に、我らの父祖達は、自らの生命を顧みることなく、天地の大義、大道を闊歩された事実は、何とも表現のしようもなく気高く、誇らしく思われてならない。未来に長く語り継がれることを念願して筆を擱く。

松本から飛び立った特攻隊員達の遺墨展を参観して

理事 廣嶋 文武

昨年長野県松本市では、国連軍縮会議の開催を記念して「戦争と平和展」が開催されたが、今年はその第2回目を迎えたとのことで、同展は8月4日～31日の間開催された。

先に会報「特攻」第92号で、「世田谷の学童疎開と特攻隊」と題し「北沢川文化遺産保存の会」の「戦争経験を聴く会・語る会」での、当時学童疎開中の幼い子供達と陸軍特攻隊武克隊、

同武揚隊隊員達との心の触れ合い等に関して報告した。この間の事情等は、北沢川文化遺産保存の会・主筆木村健氏の東奔西走のご努力に負うところが多大である。

松本市立「まるごと博物館」は、松本城の一角にあり、館内に入るや否や世田谷区立代澤国民学校の児童達と特攻隊員達との集合写真に迎えられた。そして、武克隊員や武揚隊員達の遺墨の展示場へと移る。

「いざ行かん 浅間の梅を えびらさし わたつみ遙か 香とどめん」

武揚隊長 山本中尉
「鵬友 偕行 田中少尉」等々、色紙揮豪数点、和紙巻紙揮豪十数点。



展示品の一部 (特攻隊員の遺墨)



考察するに、航空隊員達は「特攻」を自覚されていたが、学童疎開の児童達には「特攻」は教えられていなかったことを思えば、これもまた、深く複雑な思いを抱かされたところである。

これらの遺墨は数奇な運命を辿ってようやく今回の展示となったものである。例えば、代澤国民学校児童引率の柳内先生は、児童にせつせと留守宅宛に、日常生活の有りのまま―お腹が空いたとか、もっとおやつが欲しい等々―児童達の気持ちを率直に書き送らせたり、「鉛筆部隊」と名付けて、航空部隊に負けじ、と励まされていたと聞き及んだが、展示品の中には、それら

の古びた葉書も並べられていた。先にも述べたように、よくぞ今日まで保存され、蒐集され、戦後67年にしようやく陽の目を見ることができたことを思うと、誠に感慨深いものがあった。

名残を惜しみつつ博物館を去ると、再び秋山学芸員さんが、紹介する方がある。市内を案内され、博物館友の会会長の横沢氏を紹介された。「奥澤国民学校の子供達と一緒に机を並べて勉強しましたよ」とのこと。筆者は、代澤国民学校、東大原国民学校、駒繫国民学校児童が浅間温泉旅館と近くの神社や寺院等に居留していたことしか知

らなかつたが、初めて開智国民学校にも疎開児童の友垣がいることを教えてもらった。そののみか驚きはまだあつた。先に博物館で拝見した和紙の遺墨と同様の遺墨が、大切に保存されていたが、それは展示遺墨以上に特攻兵士の墨痕鮮やかなものであつた。今回の展示に出されては、と話したところ、後日早速展示され、参観者の注目するところとなつたとのことであつた。

また、今回の松本市での「戦争と平和展」について、阿部松本市議のご尽力も忘れることができないと思う。同市議は、去る5月26日、下北沢での前述の会にも参加され、早速松本市議会の壇上より「戦争と平和」について市長に質問し、この企画展の充実に尽力されたのである。同展は、「七夕人形の風物詩」と同時に開催され、酷暑の中を多くの人々が参観されて、館員達は多忙を極めたとのことである。

なお、当日は、博物館見学の前に、阿部市議のご案内で松本護國神社に参詣したので、「特攻勇士之像」建立についてもお願いをして参つた次第で、酷暑とともに誠に胸の熱くなる信州路の旅であつた。

新刊図書紹介

① 吉本貞昭著

『世界が語る大東亜戦争と東京裁判』―アジア・西欧諸国の指導者・識者たちの名言集―



② 吉本貞昭著

『世界が語る神風特別攻撃隊』―カミカゼはなぜ世界で尊敬されるのか―



話題の書である。著者吉本貞昭はペンネームで、本名は中川聖氏、また、装幀はグラフィック・デザイナーの神崎夢現氏で、いずれも当慰霊顕彰会の著名な会員である。

本書①②はいずれも著者が、旭川大学地域研究所特別研究員(専攻は中国経済論及び中国現代史)として、本来の研究の傍ら長年にわたり、大東亜戦争開戦の原因、意義等、並びに特攻隊の史実、その戦果等について、国内外の豊富な文献、戦史その他多くの資料等に当たって詳細に調査・研究し、その成果を纏めた労作である。

アメリカは戦後、昭和20年11月3日に、日本が再び連合国の脅威にならないよう、連合国軍最高司令官ダグラス・マッカーサー元帥に対して、日本人の洗脳計画を命じた。その計画とは、日本人に「侵略戦争」をやったという贖罪意識を植え付ける「戦争犯罪情報画」(ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム)と呼ばれるもので、報道と教育を通じ、アメリカに都合の良い歴史観を日本人に植え付けることを目的としたものであつた。その最初のプロジェクトは、昭和20年12月8日から全国の新聞に10回にわたり連載された「太平洋戦争史」であつた。この連載記事は、満洲事変から終戦に至る

右に掲げた2冊の本は、いずれも本年7月、(株)ハート出版から発行された

までの日本の侵略戦争を強調したもので、翌日からはNHKのラジオを通じて「太平洋戦争」をドラマ化した「真相はこうだ」の放送を開始した。これと平行して、極東国際軍事裁判、いわゆる東京裁判を強行し、この裁判を通して、日本を世界で最も好戦的で野蛮な国家に仕立て上げることに、日本人から自信と誇りを奪って行くのである。

そして、それに同調する学者や知識人、マスコミ、左翼学生や活動家たちが、反戦、恒久平和の旗印の陰に隠れて、この大東亜戦争の目的完遂のため、そして愛する家族、民族、国家のために力戦敢闘して散華した殉国の勇士達、取り分け、米兵らが最も恐れた特攻勇士達を、軍国主義者、侵略戦争加担者、無駄な死者呼ばわりをして我々の先祖、先輩、同僚達を貶めようとした。また一方、戦後の日本人も、67年もの間真実を封印した歴史教育、「戦争犯罪情報計画」の下、いわゆる東京裁判史観に基づいた教育により、過った歴史認識を持った国民が増え、反対に、正しい歴史認識を持った戦中派の国民が減少するという、大きな転換点に差し掛かっている。それと同時に日本人のモラルが急速に崩壊してきており、これは正に、亡国の前兆とも言えよう。かつてドイツ近代歴史学の祖ランケが「国民が誇りを失えば、その国は滅びる」と述べたように、日本人はまさしく滅びの方向に向かっていると、言っても過言ではないのである。この滅亡への道から再生への道に転換するには、日本人が戦前に持っていた自信と誇りを取り戻すしか、他に方法はないのである、と著者は強調している。正に同感である。

本書はいずれも、その題名が示すように、国内外の豊富な史・資料を丹念に収集、解説し、世界の多くの指導者の識者が語る「大東亜戦争と東京裁判」の真実、及び「神風特別攻撃隊」の史実を解き明かしている。是非、御一読をお薦めしたい。

○発行所「株式会社ハート出版」
〒171-0014
東京都豊島区池袋3-9-23
TEL03-35590-6077
FAX03-35590-6078
定価 各本体1600円＋税

事務局からの報告等

寄附者御芳名 (敬称略)

(平成24年7月1日～9月30日)

(単位千円)

二四	新井 有治	一七	降矢 達男	一〇	宮崎 忠夫	一〇	十川重次郎	三	佐藤 義信	三	多喜雄
一四	森 可成	一〇	高橋 光弘	一〇	大穂 利武	一〇	尼子 和世	二	下出 忍	二	千田洋之助
一〇	山田 治男	一〇	根木 東洋	一〇	市来 徹夫	一〇	森山 正義	二	広瀬 勉	二	原田 誠雄
一〇	松本 司	一〇	成富 暢三	一〇	折下 寛法	一〇	水野 伸子	二	西村 芳行	二	武居 房子
				七	林 聖二	七	笠松 澄子	二	尾関 基	二	小貫 達雄
				七	藤元 正明	七	原 武廣	二	星埜 清滋	二	三浦 晨平
				七	百目鬼 清	七	横瀬 富一	二	澤田 尚	二	服部 武志
				七	渡部 利久	七	山本 年男	二	白田 智子	二	日高 誠
				七	日比野臣三郎	七	丸井 容子	二	関口 昭平	二	川井 孝輔
				七	中島 尚史	五	飯田 雍子	二	茂木 昌三	二	氏木 武
				五	吉田 治正	五	植田 和男	二	宮本 了吾	二	藤井 常男
				五	関口 正孝	五	西川 順芳	二	岡部 尚子	二	寺井 俊一
				五	飯田 正能	五	田辺さだ子	二	堀江 正夫	二	岡本 久吉
				五	出雲 博	五	上野 保則	二	山本 健雄	二	駒場剛太郎
				五	澤部 泰	五	中村光太郎	二	林 陽一	二	岡崎 宏平
				四	高山 友二	四	前田 哲男	二	小熊 一敬	二	横山 早巳
				四	木下 矩武	四	丹 徹	二	杉原 清之	二	前園 利治
				四	山本 俊之	四	恩田 賢寿	二	水島 章	二	徳田 裕
				四	山根 秋男	四	山本 覚	二	石本登志夫	二	中島 實
				四	加藤 寛二	四	田邊 整市	二	廣嶋 文武	二	杉浦 喜義
				四	塚田 征二	四	細谷 清	二	川岸 義視	二	高梨 久義
				四	矢野 情二	三	花塚真知子	二	川人 盛幸	二	津馬 裕
				三	湯澤 一枝	三	長澤 剛	二	井出 隆夫	二	水町 博勝
				三	工藤 重民	三	萩原 健一	二	小倉 利之	二	畝田謹次郎
				三	藤井 宏	三	斎藤 正夫	二	羽瀨 徹也	二	新垣 敬輝
				三	志賀 昭夫	三	清水 典郎	二	岡崎 幸平	二	武藤 一彦
				三	滝澤 勇吉	三	北村 昭正	二	河島 慶明	二	石井 敏子
				三	海老澤善佐雄	三	中村 家久	二	青池 正夫	二	中村 敏
				三	深山 明敏	三	三春 仁	二	志村千恵子	二	星崎 雪
				三	嶋本 久代	三	相部 一正	二	中川 香織	二	阿部 長男

- 二 仁井 健治 二 小林 郁雄
- 二 水気 博美 二 緒方 順子
- 一 柏 壽 一 梶原 次男
- 一 大川 吉昭 一 野俣 明
- 一 片岡 薫 一 一鉄田 勉
- 一 飯岡 哲子 一 茂木 尚
- 一 藤井 達矢 一 高橋こすみ
- 一 上畑 幸晴

御芳志誠に有り難うございました。

新入会員名簿(敬称略)

(平成24年7月1日～9月30日)

- 茨城県 矢島 正明
- 埼玉県 土田 緩奈
- 東京都 猪瀬 和英 荻田 能久
- 宮川 勉 沼山 光洋
- 神奈川県 茨木 治人
- 新潟県 長谷川十九三
- 滋賀県 村木 隆彦
- 京都府 大岡 知
- 大阪府 緒方 順子 北村菜穂子
- 長崎県 古田 茂

会員計報(敬称略)

謹んで哀悼の意を捧げます。

- 北海道 田中 淑雄
- 宮城県 北村 宣次 (24・5)
- 群馬県 栗田 栄一 (24・3・16)
- 埼玉県 丹 徹 (24・3・1)
- 千葉県 宮崎 忠夫 (24・5・18)

東京都 志波武次郎 (24・7・7)

小島 忠

立石 昌正 (24・1)

原 祐一

中村 光雲 (24・7・18)

神奈川県 館 勇 (24・2・9)

富山県 内山 正一 (24・9・23)

徳田 外治 (24・1・27)

大阪府 荒川 伸義

徳島県 北谷 正晴

愛媛県 青木 恒男

田中 賢悟 (24・5・20)

高知県 藤田 典正 (24・8・27)

佐賀県 福元禮一郎 (24・5)

会報「特攻」第92号正誤表

次のとおり誤りがありましたので、謹んで訂正し、お詫び申し上げます。

(訂正箇所)

11頁3段8行目

誤 陸士58期

正 陸士55期

11頁3段14行目

誤 東京大学

正 東京大学大学院

11頁3段18行目

誤 コロンビア大学

正 南米コロンビア国立大学

会員ご入会のご案内

当顕彰会は、先の大戦において、祖国の安泰を願ひ、家族や大切な人たちを案じつつ、自らの命を犠牲にして、それらを護ろうとした若い特攻隊員たちの御霊を慰霊し、感謝することを目的とする団体であります。

私達は、彼らからその精神を学び、自分たちの生き方を考え、より良い社会の実現に寄与したいと活動を続けております。ご賛同の上、ご入会くださるようお願い申し上げます。

○当顕彰会の沿革

昭和34年5月前身の特攻平和観音奉賛会が全国組織化

昭和57年6月特攻隊慰霊顕彰会発足

初代会長 竹田 恒徳 元宮様

二代会長 瀬島 龍三 氏

平成5年11月財団法人認可

三代会長 山本 卓真 氏

平成23年1月公益財団法人認定

現理事長 杉山 蕃 氏

○当顕彰会の主な事業

・特攻隊戦没者の慰霊顕彰

・広報誌等の発刊

・講演会等の開催その他

○年会費

・一般会員 3000円

・学生会員 1000円

〒102-0073

東京都千代田区九段北3-1-1

靖国神社遊就館内 公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局
電話 03-5213-4594
FAX 03-5213-4594

ご投稿についてのお願ひ

ご投稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

1 原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めをお願いします。

2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協会事務局に任せ願ひます。

3 慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。

4 原稿、写真等は、原則としてお返しいたしません、必要の場合、その旨お書き添えください。

5 会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当顕彰会事務局宛とさせていただきます。

記

〒102-0073

東京都千代田区九段北3-1-1

靖国神社遊就館内 公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局

電話 03-5213-4594

FAX 03-5213-4594